

2013 年度

アジアダイナミズム班研究論文

## 日本とユーラシアの交流

—飛鳥寺を手掛かりに—

経営情報学部

3 年 市村 江梨果

3 年 多部田 裕也

2 年 勝山 義弘

2 年 杉山 友哉

2 年 吉田 剛司

天津財経大学 人文学部 経済貿易日本語科 (交換留学生)

3 年 王 星星

上智大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科 国際関係論専攻 (多摩大学 OB)

博士前期課程 2 年 宮崎 真

指導教官

金 美徳

巴特尔

小林英夫

## 謝辞

アジアダイナミズム班一同

本論文を完成させるにあたり、多くの方々の協力や助言をいただいたことに深く感謝いたします。この仕事は、我々アジアダイナミズム班の学生一同の力のみでは完遂することはできませんでした。協力していただきました方々に深く感謝の意を表明すると共に、以下にお世話になった人々を紹介させていただきます。

はじめに、九段下に寺島文庫ビルを開き、社会工学研究会という学生が切磋琢磨できる場を提供して下さる多摩大学学長の寺島実郎先生からは多くのことを学ばせていただきました。本論文の研究テーマの源泉を与えて下さり、有益な助言を提供していただきました。何よりこの社会工学研究会に関わる全ての人との出会いの場、学びの場を提供して下さり、我々も多くのことを学ぶことが出来ました。

多摩大学経営情報学部教授の金美徳（キム・ミドク）先生は、アジアグループ担当教授として研究しやすい環境や個々人に合った助言、叱咤激励、ときに笑いをもたらしてくれました。同じく多摩大学経営情報学部准教授の巴特尔（バートル）先生は、終始適切な助言と丁寧な指導を心掛けてくださいました。また多摩大学経営情報学部准教授小林英夫先生からは、古代史と経営学を掛け合わせ新しいことを書いてみないかと有益なアドバイスをいただきました。本論考の結論にある「飛鳥寺の持つ意味のゲートキーパー論からの考察」は、先生の助言なくして生まれることはありませんでした。その他、社会工学研究会の先生方からは助言とともに貴重な情報の提供などもいただき、大変お世話になりました。

そして、今年度の6月にアメリカのジョージア州にあるバルドスタ州立大学へと留学したアジアダイナミズム班のメンバーとして研究を手伝ってくれた又吉雄一さん。彼のおかげで社会工学研究会の中間発表を無事に乗り越えることができました。

またアジアダイナミズム班は、多摩大学初の試みである奈良県の帝塚山大学の飛鳥寺研究会と合同ゼミナールを行いました。飛鳥寺研究会の鷲森浩幸教授は、飛鳥寺についての歴史をやさしく丁寧に指導していただきました。清水昭博教授は、発掘作業がお忙しい中、飛鳥寺の考古学的研究についての専門的な新しい知見を教えてくださいました。大学院2年の三好直樹さん、大学院1年の上野真奈さん、人文学部3年の西連寺匠さん、人文学部2年の魚谷なつみさん、人文学部2年の松井千尋さんたちによる飛鳥寺研究の発表は、我々と同世代で同テーマを研究しているということで非常に良い刺激を与えていただきました。

最後に、多摩大学学長室の高野さんと山本さんにはこの一年間で非常にお世話になりました。お二人が事務局として、陰で我々を支えて下さることに心から感謝します。

このような人々の存在なくして、この論文を書くことはできませんでした。また、これ以外にも多くの方々に支えられて本論文の完成に至ることができました。この研究活動を支えてくれた全ての人々に深く感謝いたします。

## 目次

I.	はじめに.....	8
II.	飛鳥寺とは.....	10
III.	「アスカ」の由来.....	12
IV.	飛鳥寺の建立に携わった人々.....	15
1.	蘇我氏と物部氏.....	15
2.	聖徳太子.....	17
V.	飛鳥寺と渡来人.....	22
1.	伽藍配置.....	23
2.	瓦.....	25
VI.	飛鳥寺の基になった寺院.....	28
VII.	仏教とキリスト教 伝来の道.....	30
1.	仏教の歴史.....	30
2.	仏教の伝来.....	33
3.	キリスト教の歴史.....	36
4.	キリスト教の教え.....	39
5.	アジアと宗教.....	40
VIII.	七福神.....	44
IX.	飛鳥寺の持つ意味のゲートキーパー論からの考察.....	49
X.	結論.....	53
	参考文献.....	57
	Appendix 1. 故郷を見える旅——奈良フィールドワーク.....	60
	Appendix 2. 帝塚山大学合同ゼミにおける帝塚山大教授・学生の資料.....	67
	Appendix 3. 多摩大学と帝塚山大学との合同ゼミ及び飛鳥寺視察について.....	79

### 執筆担当者

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| I. 多部田裕也       | VII. 吉田剛司、市村江梨果   |
| II. 勝山義弘       | VIII. 杉山友哉        |
| III. 市村江梨果     | IX. 多部田裕也         |
| IV. 多部田裕也、杉山友哉 | X. 宮崎真、多部田裕也、勝山義弘 |
| V. 勝山義弘        | Appendix 1. 王星星   |
| VI. 市村江梨果      |                   |

## I. はじめに

アジア経済は新しい次元へと入っている。1993年に世界銀行が、それまで日本によって牽引されてきたアジアの成長を「東アジアの奇跡」と名付けてから20年が経つ。現在、アジアの国内総生産（GDP）は2013年に世界の3割に達し、日本、中国、その他がそれぞれ1割前後を占める。アジア開発銀行は「2050年にアジアGDPが2013年の約8倍に膨らみ、世界の52%を占めると予測した」<sup>1</sup>。つまりこの論文を執筆している私たち<sup>2</sup>が50代の時には、世界のGDPの半分をアジアが占めるということになる。現在の日本の貿易構造の5割がアジアとの取引で占められている現状を見ると、2050年頃といわず、もうすでにアジアと関わらない仕事がほぼないと言えるような世の中になっていると言えよう。

だが、世界の経済がアジアへとシフトしていく中、日本や中国を含む東アジアの国際関係はその動きに適合できているであろうか。日本の世論ではナショナリズムが高揚し、与党民主党の党首、野田佳彦首相（当時）は2012年9月11日に尖閣諸島を国有化した。これに大きく反発した中国世論は、反日デモを決行して、日系企業や日系ブランドが民衆によるデモという名の暴動的となり被害を受けた<sup>3</sup>。こうして、今までの日中関係では「政冷経熱」であったのに対して、お互いの世論感情の悪化から「政冷経凍」と揶揄される戦後最悪の日中関係にまで陥ってしまった。また尖閣諸島の国有化をする以前には、韓国の李明博大統領（当時）が竹島に上陸し、世論を煽るパフォーマンスを行ったことで日本の世論は反発し、隣の韓国とも戦後最悪の日韓関係と揶揄される状態に陥った。

こうした政治上で不穏な状況が続けば、日本とアジアの交流は妨げられてしまうのではないだろうか。世界の経済がアジアへとシフトしていく時に、そのような状況では東アジアの活発な経済交流は妨げられてしまう恐れがある。政治上の問題からナショナリズムに火が付くことで起きる反日デモのようなアジアにおける経済リスクを憂慮し、アジアへの進出を躊躇してしまう日系企業も増えてくるだろう。そのような状態が続けば、日本における「失われた20年」が30年、40年と続いていき、日本国内の国民の生活は窮乏してますます酷いことになることも懸念される。

このような状況に対し、日本とアジアの国々との政治レベルでの対話に、古くからある「アジアの共通価値」を提示することで、この不穏な国際関係に終止符を打てる可能性はないだろうか。そこで「アジアの共通価値」という、お互いが敬い、手を取り合える価値観として、象徴するものにヒントを与える存在として「飛鳥寺」を取り上げてみたい。なぜならば飛鳥寺は日中韓による初の国家間プロジェクトだといえるからである。

---

<sup>1</sup> 日本経済新聞「アジア跳ぶ（1）世界の5割経済圏、2050年GDP 8倍、沸き起こる中間層」2013/01/01 朝刊1ページより引用。

<sup>2</sup> この論文を執筆している我々の平均年齢は20歳である。

<sup>3</sup> 日本経済新聞「反日デモ、80都市超す、中国当局、抑制の動き、工場停止や店舗休業拡大」2012/09/17 朝刊1ページ

具体的に考えてみよう。インドで興り、シルクロードを通して中国へと至ることで発展・分化した仏教が、朝鮮へと渡る。その朝鮮から何百人もの渡来人が日本へと渡来し、飛鳥寺を建立した。飛鳥寺を建立した僧は、百済の僧である弥勒（みろく）の他にも多数いた。高句麗の僧の曇徴（どんちょう）や聖徳太子の師匠として有名な高句麗より渡来した僧の恵慈（えじ）など大勢の僧が飛鳥に住んでいた。更に高句麗王が飛鳥寺の完成を願って黄金を送った。新羅からは舍利、仏像、塔、仏具などが贈られ、泰寺（たいじ）や四天宝寺に納められた。したがって飛鳥寺は、日中韓による初の国家間プロジェクトであるだけでなく、異文化が接触する国際性に富んだ文明化の総合センターとしての役割を、日本とユーラシアの関係において果たしていたともいえる。

このように、飛鳥寺がユーラシアの風を運んだアジア共通の価値の中の一つではないかと考え、研究を進めた。本論文では、飛鳥寺という手掛かりを鍵に、飛鳥寺の「アスカ」という言葉の語源に関する調査・研究や、発願・建立した人物である蘇我氏（蘇我馬子）やそれと敵対する物部氏、飛鳥寺と同時期に建てられた法隆寺を建立して後の日本に仏教を広めていった聖徳太子といった人々の研究や、寺院の伽藍配置の研究、飛鳥寺を建立する技術者として日本へとやってきた渡来人についての研究、飛鳥寺を建立する際に参考となった朝鮮の寺院や屋根に使われている瓦や寺院の発掘についての研究、飛鳥寺の基になった寺院についての研究、仏教伝来の研究などの、飛鳥寺という手掛かりから見つけたテーマを多数研究した。そして、多摩大学学長寺島実郎先生より「歴史は一直線のものでも自己完結するものでもない。アジアは非常に多様であり一つの価値で説明できるものではないが、その多様性はアジアの持つ寛容さ（絶対神を置いている中東の非寛容とは明らかに異なるもの）でもある。日本は極東の存在として、そのような多様性——非常に色々なもの——を受け止めてきた」といった助言をいただき、「アジアの共通価値」は一つだけではなく、多様であるという事に気付いた。

そこで研究の後半では既存のテーマの研究と並行して、新たにアジアの多様性と日本のいい加減さが如実に表れていると思われる「七福神」の研究と、「日本にはなぜキリスト教徒の数が少ないか」といった研究テーマを追加した。また、「飛鳥寺の持つ意味のゲートキーパー論からの考察」の章では、歴史学的なアプローチに加えて、さらに我々が学んでいる経営情報学的なアプローチを加えた、歴史学と経営学のシナジー効果を目指した独自研究に取り組んだ。

そうして出来上がったものがこの論文である。その内容からアジアの多様さと、日本人のある種のいい加減さが存分に見て取れる。これらの様々な研究内容から鑑みるに、異なるものを受け入れる懐の広さと、異なっても良いものであればそれを受け入れるというある意味大雑把でありながらも「良いものは良い」という考え方が日本の特徴なのではないだろうか。我々の中に流れているモノはこれほど多様なのかと驚きと同時に感慨を覚えるが、「アジアの共通価値は多様である」という言葉を胸に、アジアの政治的対話をうまく運ぶための手掛かりをまとめたものがこの研究論文である。

## II. 飛鳥寺とは

飛鳥寺は日本初の本格的な仏教寺院である。伽藍配置は塔を中心とした3つの金堂を持つ古代寺院では今までに見られない形式であり、これ以後は仏寺建築の基本となった寺院である。飛鳥寺は複数の呼称がある。「法興寺」「元興寺」とあり、公称は「安居院」「鳥形山」である。現在の所在は、奈良県高市郡明日香村大字飛鳥にある。

飛鳥寺は、日本書紀によると用明2年(587年)に蘇我馬子が物部守屋との戦勝を祈願して発願し、そこから造営が始まり、推古4年(596年)に寺院の造営を終えた後、推古13年(605年)<sup>4</sup>に飛鳥大仏<sup>5</sup>が完成して納められ、18年かけて建立された。寺院の造営が終わった時点では丈六仏<sup>6</sup>がまだ完成しておらず、中金堂は祀る大仏が空のまましばらくそのままだったと推察されている。用明天皇が死去した後に起こる大王家の後継者争いによる蘇我氏と物部氏の対立の最中に造営が始まり、額田部皇女(ぬかたべのみこ)が推古天皇として即位し、推古・厩戸皇子・蘇我馬子を中心とする安定した体制が確立した頃に主要な部分が完成し、そこから大陸より伝来、仏教が広まった。

飛鳥寺は建立時の寺号を「法興寺」といい、大安寺・川原寺・薬師寺とともに飛鳥の四大寺と称され、仏教の中心として栄えた。710年の平城遷都後は、安居院だけ残して平城京に移転して「元興寺」と寺号を変えた。寺号を変えたため、複数の名称で呼ばれる。

図2は現在の飛鳥寺である。当時は広大な敷地の寺院であったが、都が平城に移ったため衰退した。今では図2の安居院のみであり、中には図1の飛鳥大仏が祀られている。飛鳥大仏は正しくは、金銅釈迦如来坐像(こんどうしゃかによらいざぞう)といい、制作年が判明しているものとしては日本最古の仏像である。飛鳥大仏の高さは2メートル75センチある。火災に遭ったため創建当時の部分は、顔面・左手・右手の三指だけである。当時の飛鳥寺や飛鳥大仏を作った技術は、相当高いレベルであったと考えられており、日本の技術者だけでなく、海外より渡来した技術者の指導によって可能になったものである。

---

<sup>4</sup> 元興寺縁起の丈六光背銘によると巳巳年＝推古17年(609年)の完成と書いてある。

<sup>5</sup> 正式名称を金銅釈迦如来坐像という。

<sup>6</sup> 金銅釈迦如来坐像の別名。飛鳥大仏ともいう。

図1. 金銅釈迦如来坐像



撮影：巴特尔先生

図2. 明日香村 飛鳥寺



撮影：市村江梨果

### III. 「アスカ」の由来

飛鳥寺とは、奈良県の明日香村に建てられたお寺である。この飛鳥寺の『飛鳥』と明日香村の『明日香』は、読み方は同じ『アスカ』でも、異なる漢字が使われている。この『アスカ』という言葉の由来は何なのか、アスカという読み方が基になっているのか、それとも漢字が基になっているのかを複数の説から検証してみる。

調査の結果『アスカ』という言葉の由来には幾つかの説があり、それらには仏教が伝えられる間に通ったインド、中国、朝鮮の各国の文化、そして日本の飛鳥寺の建設当時の地形や時代背景が反映されているものだという事が分かった。

インドに由来する説は、仏教発祥の地であるインドのアショカ王の名前から転訛したものである<sup>7</sup>。インドでは「アスカ」とは理想の楽園という意味の言葉だとも言われている。

朝鮮に由来する説としては、渡来人が日本に来て安住の宿とした場所を安宿（あすか）と名付けた。安宿（あすか）は、朝鮮語で「やすらかなるふるさと」という意味のアンスク、これが訛って「アスカ」になったとされるものである。

中国からの由来は、中国から伝来した漢字の意味が基になった説である。『アスカ』は、阿須賀→明日香→飛鳥という様に変化していった。「明日香」は神である太陽（日）が文字の中に3つ付く。「飛鳥」は万葉集の一句にある「飛ぶ鳥」がアスカと読むようになったものである。713年（和銅6年）に「諸国の郡郷の名に好き字（漢字二文字）をつけよ」という命令によって、「飛鳥」になったと言われている。

また、日本の当時の時代背景が基になった説としては、古代において、年号に白雉、朱鳥、白鳳などと鳥の名前を用いることが多かった。鳥は尊い存在とされていた。アスカは「イスカ」という鳥の名前から転訛したものである。

そして、地形を表現する単語が合成されてできたものという説もある。ア（接頭語）スカ（洲処—川水、海水等によって生じた砂地）、またはアス（浅す—川、海等が浅くなる又は水が涸れる）+カ（処）、もしくはアス（崩地）+カ（処）である。飛鳥地方は、川原とか豊浦といった水辺に関係ある地名が多く残っている。

これらの国以外からの説もある。蘇我氏が一族の名前である「ソガ（スカ）」にシュメール語（メソポタミア）で「聖なる」という意味の接頭語の「ア」を付けたもので、聖なる蘇我という意味で「アスカ」になったと言われている。

---

<sup>7</sup> 参考：明日香村 古代文化の香り豊かな郷「明日香と飛鳥あすかの由来」  
([http://www.asukamura.jp/kids/yomoyama\\_yurai.html](http://www.asukamura.jp/kids/yomoyama_yurai.html))



図3. アスカの由来

	読み方説				漢字説	
	外来説(朝鮮)	外来説(インド)	地形説	シュメール語説	漢字二文字説	鳥説
定説	渡来人が日本に来て安住の宿とした場所を安宿(あすか)と名付けた。安宿(あすか)は、朝鮮語で「やすらかなるふるさと」という意味のアンスク、これが訛って「アスカ」になった。	仏教発祥の地インドのアショカ王の名前から転訛したもの。インドでは「アスカ」とは理想の樂園という意味の言葉だとも言われている。	地形を表現する単語が合成されて出来たもの。ア(接頭語)スカ(洲処一川水、海水等によって生じた砂地)、またはアス(浅す一川、海等が浅くなる又は水が涸れる)+カ(処)である。	蘇我氏が一族の名前である「ソガ(スカ)」に接頭語の「ア」を付けた。「ア」はシュメール語(メソポタミア)で「聖なる」という意味の接頭語。聖なる蘇我という意味で「アスカ」になった。	阿須賀→明日香→飛鳥という様に変化していった。「明日香」は神である太陽(日)が文字の中に3つ付く。「飛鳥」は万葉集の一句にある「飛ぶ鳥」がアスカと読むようになったもの。	古代においては、年号に白雉、朱鳥、白鳳などと鳥の名前を用いることが多かった。鳥は尊い存在とされていた。アスカは「イスカ」という鳥の名前から転訛したもの。
否定説	この説が出されたのは1920年(大正9年)に出版された『日本古代文化』(和辻哲郎)という本である。近年に出された説であるため信憑性が薄い。				藤原宮跡の発掘により発見された木簡に書かれていた一文に「飛鳥」という文字があり、この木簡は七世紀末のものだと判断された。「飛鳥」の文字が使われた最古の用例である。	

これらの説を見ると、飛鳥寺は仏教のお寺であるが、『アスカ』という言葉は仏教と直接的な関係性は低いと考えられる。飛鳥寺は、正式名称が法興寺であり、飛鳥寺とは通称の呼び名である。いつから法興寺が飛鳥寺として親しまれたかは定かではないが、奈良時代の書籍である『日本書紀』には「飛鳥寺」という表記が使われているため、奈良時代には既に飛鳥寺と呼ばれていたと判断できる。

飛鳥寺は日本で最初の仏教のお寺である。朝鮮から日本に仏教が伝わり、仏像や仏法が入ってきて仏教のためのお寺として初めて日本で建てられた。正式名称である法興寺は、仏教において重視されている概念である「法」という文字が使われており、仏教と関連の深い名称であることが分かる。

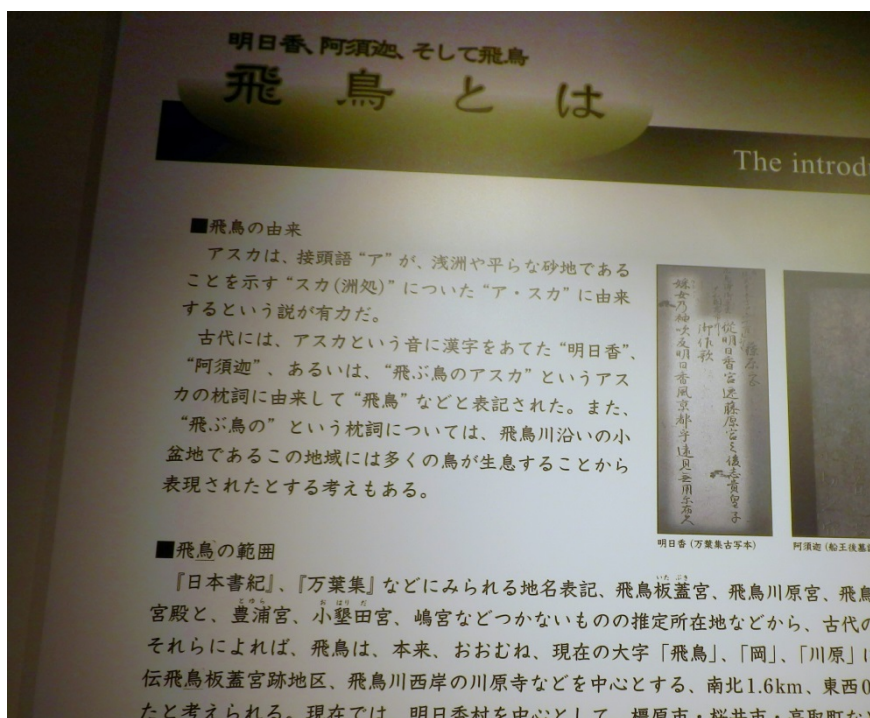
しかし、「飛鳥寺」という名称は『アスカ』の由来から仏教との関連が見られない。当時の人々からは『アスカ』という言葉が法興寺の最も親しまれた呼び名であったと考えられる。『アスカ』という言葉が仏教との関連がないということは、仏教が『アスカ』という言葉を受け入れたと考えることができる。そして、仏教のお寺である法興寺が『飛鳥寺』と呼ばれることを否定しなかったという事は、仏教が日本に伝えられるまでいくつもの国を渡る間に、様々な異なるものを受け入れる要素を身に付けたのではないだろうか。

このように、日本に伝わった仏教においても飛鳥寺においても、異なるものを受け入れる懐の広さと、異なっても良いことであればそれを受け入れるというある意味大雑把

でありながらも「良いものは良い」という考え方が日本の特徴なのではないかと考える。

このような考えを持ち飛鳥寺でのフィールドワークを行ったのだが、飛鳥寺の近隣にある飛鳥資料館では「飛鳥の由来」は地形説が有力であるとされていた。

図4. 飛鳥の由来



撮影：市村江梨果（飛鳥資料館で撮影）

このことにより、複数ある説の中で最も有力な「アスカ」の由来は地形説であり、飛鳥という名前は飛鳥寺が建てられたこの土地に根付いた言葉であることが分かる。あくまで有力な説として表現されているため真相はわからないが、いくつもの説が出ているという事だけでも飛鳥寺が明日香村という土地との関係だけではなく当時の時代や仏教を通じたアジアの国々との関係もとても重要であったと言えるのではないだろうか。

#### IV. 飛鳥寺の建立に携わった人々

##### 1. 蘇我氏と物部氏

そもそも飛鳥寺を建立した人物は、蘇我馬子（そがのうまこ）である。蘇我馬子が崇峻元年（588年）に発願して飛鳥寺を造営した。推古元年（593年）には塔に仏舎利が奉安された。推古14年（606年）には、止利仏師（とりぶつし）である鞍作止利（くらつくのとり）が作ったといわれる釈迦如来像（しゃかによらいぞう）が安置された。この蘇我馬子という人物はどういった人なのであろうか。蘇我稲目（そがのいなめ）の子であり、蘇我蝦夷（そがのえみし）の父でもある。敏達天皇の時に大臣（おおおみ）となり、大連（おおむらじ）の物部守屋（もののべもりや）と対立をした。対立をした理由は、蘇我馬子は日本に入ってきた仏教を崇拝しようとする主張したが、物部守屋はこれに反対して日本に古来いる神々である日本神道の神である八百万の神々を崇拝しようとする主張したため、それぞれの意見が割れていたのである。

この蘇我と名字がつく人々は蘇我氏とくくられることもある。彼らは古代の中央豪族で、蘇我石川宿禰（そがのいしかわのすくね）がこの蘇我氏の祖先と言われている。聖徳太子も蘇我氏の血縁関係に属する。飛鳥寺の発願から始まる仏教の日本への伝来は、こうした蘇我氏の血筋が政権を執ることがきっかけで広まっていった。

では、なぜ蘇我馬子は仏教を崇拝しようとする主張したのだろうか。馬子もそれまでは日本神道を崇拝していたはずである。ところが当時の日本の国家体制は、隣の中国（隋）や朝鮮（高句麗や百済、新羅）といった当時の先進国と比べると天と地ほどの差があった。具体的に述べると中国と日本では、大都市と村のように国家体制や文明社会のレベルに開きがあった。日本は当時、中国（隋）のように戸籍制度や法律の整備がされていなかった。しかも隣の中国では589年にこの隋王朝が中国を統一してしまった。強大な中央集権的帝国である隋は、今でいう法律制度に当たる「律令」や「郡県制」を敷き、「科挙」といった官僚制度を作り「文字」や「度量衡」、「貨幣」の統一を行い、高度な文明を築き、周辺諸国にプレッシャーを与えていた。日本は遣隋使を隋へと送り、この隋と国交を結ぶことで、自国の文明が遅れていることを知り、この隋が攻めてきたらまずいと思い、国家体制の強化を志向したのである。それゆえ、蘇我馬子は中国の中央集権体制を見習い、仏教を崇拝し、日本の国家体制を変えるべく物部氏のような日本に古来より存在する保守派の豪族と対立することになったのである。

隋が中国を統一した頃には、朝鮮半島では百済が滅亡しようとしていた。この百済からの亡命者が日本へと渡来人として渡ってきた。蘇我馬子は彼らに目をつけ、仏教を使って国家統治をするために、その仏教の象徴として仏閣を建造しようとした。それが飛鳥寺である。

物部氏とは大和政権の豪族である。大伴氏と並び軍事力を担い大連となる。大連とは、

古墳時代のヤマト王権の役職のひとつであり、大夫を率いて大王（天皇）の補佐として執政を行った人々である。物部氏は、物部尾輿（もののべおこし）の頃から蘇我氏と対立するいわば犬猿の仲であった。物部氏の足跡そのものを正確に読み取れる資料が乏しいため、謎の氏族となっている。

二つの氏族の争いの激化を詳しく見てみると、蘇我氏は仏教崇拝の立場をとった際に、隣国はすべて仏教を崇拝していると主張したが、物部氏は仏教廃仏の立場をとっている。仏教を崇拝する事は日本古来の天地社稷ハ百万（てんち しゃしょく やおろず）の神々の怒りを買うことになるかと主張したのである。こうした意見の相違から争いに発展したと見られている。そして、蘇我馬子は飛鳥寺の建立を発願することで物部守屋との戦勝を祈願した。ここから飛鳥寺の建設が始まったのである。そして、蘇我馬子と物部守屋が戦った丁未の乱（てんびのらん）で、物部氏は滅亡する。蘇我氏が物部一族を滅ぼし、蘇我氏に対抗する勢力がいなくなり、蘇我氏が仏教を日本に広めていくことに反対する勢力が小さくなっていったと見られている。

こうして蘇我馬子は物部一族を滅ぼして仏教崇拝に反対する勢力を叩き潰した。その後から飛鳥寺の建設は佳境へとさしかかる。蘇我氏は朝鮮半島から多くの渡来人を支配下にし、倭国（日本）の繁栄につとめた。595年には高句麗から恵慈が渡来。厩戸皇子（聖徳太子）の師となる。そうした厩戸皇子の仏教理解や知識を有効活用するために蘇我馬子は厩戸皇子と協力し、その後の繁栄に努めたのである。



さて、2013年10月28日（月）、29日（火）に我々アジアダイナミズム班は、多摩大学初の試みとなる協定校の帝塚山大学との合同ゼミフィールドワークへと出かけた。場所は奈良県明日香村である。初日に帝塚山大学へ行き、飛鳥寺研究会の人々と交流したが、その経験は我々が持っていた飛鳥時代や白鳳時代<sup>8</sup>についての認識を変えることになった。



我々は、蘇我氏と物部氏の豪族間対立は、仏教を巡る争いだと認識していたが、最も重要な問題は「豪族間の後継者争い」であるということは全く想定していなかった。だが、仏教問題はその後の付随的なものであるようである。当時の政権内部と豪族が重視する血縁関係をよく見てみるとそのような絵が描けるという。

はじめに用明天皇が587年に死去する。用明天皇は即位して2年という短い期間で亡くなった。そのために後継者争いが勃発した。用明天皇の後継者としては穴穂部皇子の即位

---

<sup>8</sup> 「白鳳時代」とは645年から709年の文化史の美術品において使われる言葉だが、この期間を指す言葉がないため、便宜上この言葉を使わせてもらった。

が予定されていたと思われるが、それを忌避する動きが起こり<sup>9</sup>、有力な後継者が5人浮上してくる。

一人目は穴穂部皇子（あなほべのみこ）という用明天皇から二つ前の欽明天皇の子供であり、母は蘇我馬子の子小姉君（おあねのきみ）という蘇我系の血縁者である。

二人目は泊瀬部皇子（はつせべのみこ）という用明天皇から二つ前の欽明天皇の子供であり、母は蘇我馬子の子小姉君という蘇我系の血縁者である。

三人目は押坂彦人大兄皇子（おしさかのひこひとのおおえのみこ）という用明天皇から一つ前の敏達天皇の子供であり、母は広姫（ひろひめ）という息長氏（おきながし）系の血縁者である。

四人目は竹田皇子（たけだのみこ）という用明天皇から一つ前の敏達天皇の子供であり、母は額田部皇女（ぬかたべのみこ）<sup>10</sup>である。額田部皇女は、欽明天皇と蘇我馬子の子供である堅塩媛（きたしひめ）の子であり、これも蘇我系といえる。

五人目は厩戸皇子という用明天皇の子供であり、母は穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）という欽明天皇と小姉君の子供なので蘇我系の血縁関係である。

用明天皇が死去する直前から物部守屋は別業（なりどころ）<sup>11</sup>のある阿都<sup>12</sup>へ退き、武装して味方を募った。蘇我馬子は血縁関係にある泊瀬部皇子（のちの崇峻天皇）と竹田皇子と厩戸皇子と連携し、有力後継者と思われていた穴穂部皇子を攻撃して内紛が始まる。その後馬子らと守屋が渋川<sup>13</sup>で戦闘が勃発し、物部守屋が負けて物部氏は滅亡する。

この後継者争いでは、泊瀬部皇子が勝利した。そして彼は用明天皇の後釜として、崇峻天皇として即位したのである。しかし崇峻天皇は、「日本書紀」によると馬子の命により暗殺されてしまう。詳細は未だに不明である。その後、額田部皇女が即位し推古天皇となる。こうして日本史上初めての女帝が生まれ、推古天皇・厩戸皇子・蘇我馬子を中心とする安定した体制が確立し、長期的に政治的安定をもたらした。

用明天皇の死去による政治的動乱はこの時点でようやく終息し、その後はこの三者により仏教の崇拝が推進されていくという歴史の流れとなっている。

今回のフィールドワークにより以上のような新たな情報と知見に恵まれた。その成果により、この論考も深まったと思われる。

## 2. 聖徳太子

聖徳太子とは、推古1年（593年）以前の推古天皇の摂政となる厩戸皇子のことである。

---

<sup>9</sup> 穴穂部皇子が忌避された理由はよくわからない

<sup>10</sup> 推古天皇が天皇となる以前の名前。別名は、豊御食炊屋姫尊（とよみけかしきやひめのみこと）。

<sup>11</sup> 当時の古代の別荘。

<sup>12</sup> 河内国の別名。

<sup>13</sup> 渋川は別名、阿都であり、阿都は河内国である。

聖徳太子は6世紀後半から7世紀前半にかけて蘇我氏と同様に、他国からの文化を積極的に取り入れようとしていた飛鳥時代を象徴する重要な人物である。当時の情勢を簡単にまとめる6世紀に巨大な統一王朝、隋が現れた。隋に対して最も驚異を感じた国が高句麗だ。当時、倭国と高句麗の交流はほとんどみられなかった。しかし、高句麗は隋ができる直前に倭国との関係を結ぼうと試みた。このようにして、高句麗と倭国が外交を交わすようになった結果、厩戸皇子の周りには蘇我馬子の元へ集まった高句麗からの使者、僧侶が多く存在した。厩戸皇子の時代に百済のみだけであった外交が高句麗、新羅、隋と多様に外交を結んでいった。この時代に、隋を通じてペルシャやユーラシア圏の文化が受け入れられるようになっていった。つまり、6世紀から7世紀にかけて、ユーラシアとの交流が盛んに行われ始めた時代である。

厩戸皇子は推古1年(593年)に額田部皇女が推古天皇として即位する際、摂政として皇太子、聖徳太子となった。厩戸皇子は、用明天皇と穴穂部間人皇女のもとに生まれた。図5から分かる通り、父である用明天皇の母は堅塩媛、母である穴穂部間人皇女の母は小姉君と二人とも蘇我稲目の娘である。これより、厩戸皇子は蘇我氏の血を濃く受け継いだ人物だということがわかる。厩戸皇子が若くして摂政となったのは、蘇我馬子が意見の通しやすい血族を政治の中心に置くことで政治を執り行おうとしたからである。また、仏教に対して傍観、中立であった欽明天皇、敏達天皇、崇峻天皇、推古天皇の各天皇と違い、厩戸皇子は仏教を受容し、帰依していたことも要因の一つである。

厩戸皇子は大陸からの文化を取り入れ、蘇我馬子らとともに仏教を広めることに尽力をつくしていた。そのために、様々な政策を行っていた。

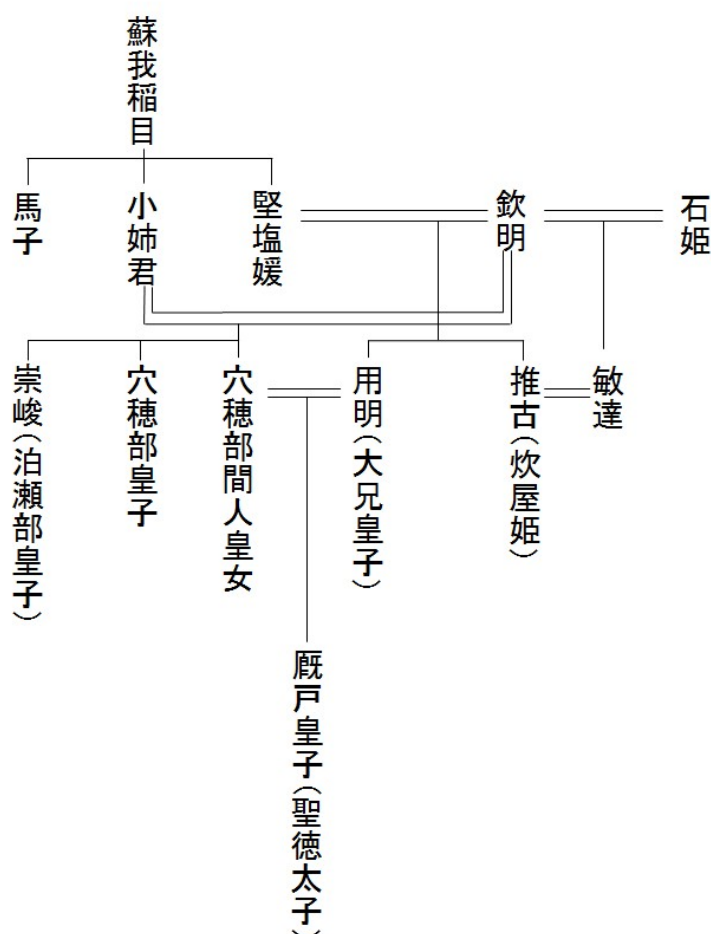
厩戸皇子は用明2年(587年)、物部守屋討伐のときに戦勝を祈願し、戦後私寺である四天王寺を建立した。5章の伽藍配置で詳述するが、この四天王寺は高句麗の都平壤にある金剛寺(こんごうじ)また清岩里(せいがんり)廃寺と同じ造りになっている。これから、厩戸皇子は他国の文化で私寺を造るほどに仏教に帰依していたことがわかる。

厩戸皇子は摂政聖徳太子として「最初に天下に布告したことは、仏教を正式に国の宗教として受容することを公にしたことである<sup>14</sup>」。その後、高句麗からの使者、恵慈を師とすることで隋、新羅の文化や制度を学んだとされている。恵慈から学び取ったことを活かし、推古11年(603年)に冠位十二階を制定した。この制度の元は新羅、高句麗、百済のものであるが、この三国は名称に五常の徳目を用いてはいなかった。つまり、聖徳太子の理想は冠位十二階の方針が明らかにしていることが分かる。冠位十二階は、今までは氏と姓で地位が決められていたものを功績や能力によって評価を行うというものであり、目的は豪族を抑え、天皇家の権威を確実なものとするために導入されたものである。また、隋に対し対等な国であることを伝えるためではないかともされている。そして、最終的に日本を中央集権国家にし、身分制度を確立することにあつた。推古12年(604年)に制定された十七条の憲法も冠位十二階と同様に恵慈の学びから作られたものである。

---

<sup>14</sup> 国史大辞典6「こまーしと」の項 573 ページより引用

図5. 蘇我氏の家系図



出典： <http://www5.ocn.ne.jp/~toyokazu/jpn/nswana/keizu.html> より一部抜粋し作成

恵慈から学ぶだけではなく隋や新羅へ使者を派遣し外交を進めていた。推古8年（600年）に最初の使節団、遣隋使を派遣した。隋の文化を取り入れることが目的であったが、日本の政治の状態が道理に合っていないと隋の皇帝によって帰された。その後、推古15年（607年）に小野妹子らを第2回目の遣隋使として派遣した。この際、聖徳太子が隋へ送ったとされている国書には、「日出ずる処の天子、書を日没とする処の天使に致す。つがなきや」と記されており、隋との対等な外交を求めたことが分かる。

冠位十二階では最終的に日本を中央集権国家にし、身分制度を確立することだと言ったが、聖徳太子は仏教を利用してこれを実現しようとしていた。しかし、今までとは異なった政治方法、異文化による統制は簡単には受け入れられるものではなかった。そのため、仏教の教えを人々が学ぶ必要があった。また、仏教を広めるために聖徳太子自身も仏教を深く学んでいた。

聖徳太子は仏教に対する造詣を講経と製疏によって現していた。講経については「勝鬘経」と「法華経」の二部。製疏は「法華義疏」四巻、「維摩経義疏」三巻、「勝鬘経義疏」

一卷である。三書ある義疏は経典を詳しく記した注釈書であり、各字句について意味を説き明らかにしたものだ。隋の学匠の書を参考にしているが同じ説き方をするのではなく、聖徳太子自身の判断や解釈によって書かれた。6世紀に始めて伝えられた仏教が一部の人間に留まらず、全国に広まったのは、柔軟で分かりやすい解釈が多くの人に受け入れられたからである。仏教発展の基板は聖徳太子が義疏を記したからであろう。

表 1. 聖徳太子の業績

西暦	出来事
-----	用明天皇と穴穂部間人皇女のもとに産まれた。
推古 1(593)	推古天皇が即位。厩戸皇子が皇太子となり、摂政となる。 四天王寺を建立。
推古 2(594)	仏教興隆の詔を発する。
推古 3(595)	高句麗より、恵慈が渡来。聖徳太子の師となる。
推古 8(600)	第 1 回遣隋使、新羅征討の軍をおこす。
推古 9(601)	斑鳩宮の建設をはじめめる。
推古 10(602)	新羅征討の軍を計画。
推古 11(603)	冠位十二階を制定。
推古 12(604)	十七条憲法を制定。
推古 13(605)	聖徳太子は斑鳩宮に移る。
推古 15(607)	小野妹子らを隋へ派遣。法隆寺を建立。
推古 23(615)	仏教書「三経義疏」を著す。
推古 30(622)	聖徳太子が逝去。

当時隋や百済、新羅との交流を行い仏教が広まるきっかけを作った人物は蘇我氏である。しかし、蘇我氏は仏教が広まることに熱心ではあるが、積極的に行動はせず消極的であった。一方、聖徳太子は仏教を広めることに尽力をつくした。仏教を根底に置いた政治体制、冠位十二階や十七条の憲法を制定。中央集権国家の実現を目指していた。また、仏教書「三経義疏」を著すなど、大陸から伝わった仏教を分かりやすくまとめた本を作り、日本に仏教が広まる基を築いた人物が聖徳太子である。

この二人の関係は決して友好的だとはいえない。なぜなら、共に仏教を広めることを目的としていた二人だが、最終的な目的は異なっているように感じられるからである。蘇我馬子は崇峻天皇を暗殺するなど、邪魔になる者を排除することで政権を握り続けようとしたのに対し、聖徳太子は冠位十二階、十七条の憲法など、大衆を平等に評価し能力のある人が政治を行う体勢を作ろうとしていた。蘇我馬子は蘇我氏の繁栄のため、聖徳太子は倭国の繁栄のために仏教を受容したのではないだろうか。このような蘇我馬子が政権を蘇我の血族以外が握る可能性の出てくる冠位十二階や十七条の憲法を制定することを容認し



ている。もしくは、容認せざるを得なかったのではないか。これは二人が共存し合う関係にいたからではないだろうか。一方、聖徳太子は蘇我馬子に血縁関係の深い崇峻天皇と穴穂部皇子を殺害されている。しかし、蘇我馬子の暗殺などを許容し、摂政として政治を執り行う立場を選んでいる。

このように、お互いが共存するために許容し合う蘇我馬子と聖徳太子の関係は、友好的とは言えないが効率良く成長、発展させていくために関係を持ち続けている日中韓の現状に被るものがあると考えている。この二人を探ることで、現代の日中韓の関係を改善する糸口が見えてくるのではないだろうか。

## V. 飛鳥寺と渡来人

1956年～1957年、飛鳥寺の発掘調査により、多くのことが明らかになった。その一つは渡来人と深くかかわっているということである。当時の倭国に渡来人が多数きたという文献が残っている。背景としては、韓半島内の急激な政治情勢の変動があり、これが多くの渡来人を生み出した。日本書紀によれば、5世紀後半、技術集団が倭国に渡来したと書かれている。鉄器を作る人、土木技術者、家畜を育てる専門家、衣服を作る人などである。他にも、外国に遣わされる留学生や留学僧、日本の寺院で活躍する僧侶は渡来人が多数占めていた。特に、文字を書き、計算をする文字文化、土地経営、地方行政面でも渡来人の技術が使われている。渡来人は倭国の発展に、実務的な面において大変大きな役割をはたした人々である。そのなかでも、飛鳥寺建立に関わった、主な8人の渡来人が以下である。

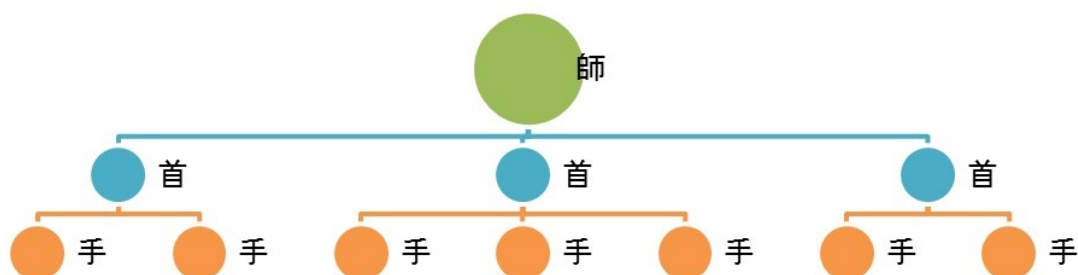
表2. 飛鳥寺を作った渡来人

寺師	太羅末太（だらみだ）
	文賈古子（もんげこし）
鑪盤(ろばん)師	将徳白味淳（はくまいじゅん）
瓦師	麻那文奴（まなもんぬ）
	陽貴文（ようきぶん）
	布陵貴（ふりょうき）
	昔麻帝弥（しゃくまたいみ）
画人	白加（びやくか）

上記は日本書紀をもとにしている。また、醍醐寺本『諸寺縁起集』所載の「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」には、9人の名前があるなど、いくつかの説がある。寺師・鑪盤師・瓦師が主に飛鳥寺の建立を行い、書人が記録を司り、または画人がこれに装飾を加えたと考えられている。

上記の師が指導にあたったとされ、組織構成もなされていた。師一首一手で構成されており、師にあたるのは、上記の寺師・鑪盤師・瓦師にあたり先進技術を持った渡来人、首には上級の技術者、手には下級の技術者である。これをわかりやすく示したのが図6である。

図6. 飛鳥寺 建設者の組織構成



百済から渡来した寺師・鑪盤師・瓦師の指導のもとに、それぞれが「手」と呼ばれる下級技術者を率いていた。師（寺師・鑪盤師・瓦師）―首（上記四人）―手の順で組織されている。師（先進技術を持つ新しい渡来人）・首（在来の渡来人からなる上級の技術者）・手（下級技術）である。

首―手の組織は、おそらく六世紀以前の日本にすでに成立していたと思われる。貴族、あるいは一般人の要望に答えて、ある程度の技術が鍛錬されていたと思われる。その基礎があったから、新しく朝鮮から渡来した「師」の持つ進んだ技術を吸収・消化して、飛鳥寺建立に参加し成就することができたと考えられる。

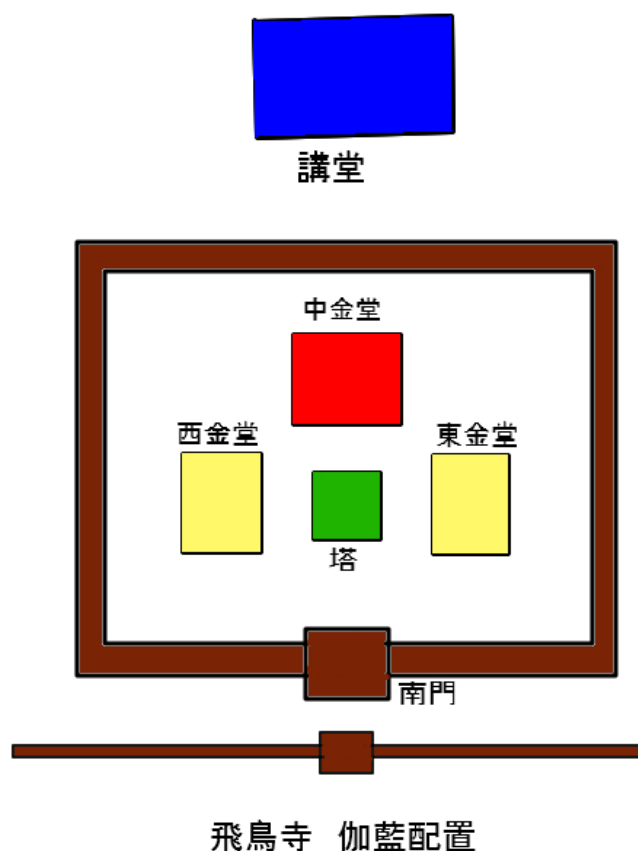
『五～六世紀以来、主として朝鮮から、場合によっては中国南朝から、進んだ文化を受け入れ、これを受け入れるに際し、東漢氏やその増毒の身狭村主が渡来人の管理にあたったという所伝は、飛鳥寺造営における山東（倭）漢氏の役割と共通するものがある。<sup>15)</sup> 参考文献ではこのようにされている。だが、首・手の数は未知数である。首―手の組織は6世紀以前からあるとされている。組織構成を通すことで、飛鳥寺の建立、技術の吸収が加速し技術が流布した。そうしたことで、朝鮮半島にある寺院との類似点を見つけることができる。そこで、その中から、飛鳥寺の伽藍配置と瓦について着目した。

## 1. 伽藍配置

伽藍とは、寺院の建物を指す言葉であり、その配置のことを伽藍配置という。飛鳥寺の伽藍配置は1956～57年の発掘調査によりわかった。図7は飛鳥寺の伽藍配置を上からみた図である。伽藍配置は塔を中心として、東には東金堂、西には西金堂がある。北には石段の上に東・西金堂とほぼ同じ大きさの中金堂がある。三方にほぼ同じ大きさの金堂を置くという「一塔三金堂」の伽藍配置であった。中金堂は、東・西金堂より一段上にあることから、東・西金堂より位が高いことがわかる。

<sup>15)</sup> 直木孝次郎「直木孝次郎古代を語る 9 飛鳥寺と法隆寺」P18 L12～15

図7. 飛鳥寺の伽藍配置

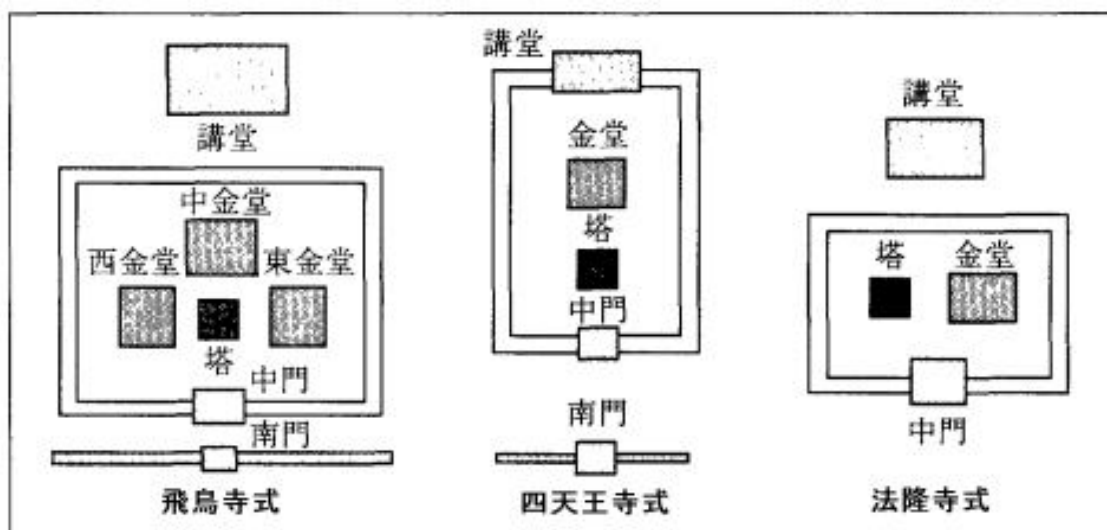


本論文では、一塔三金堂の伽藍配置を飛鳥寺式と記す。発掘当時、日本では前代未聞の形式であった。従来、古代寺院として、四天王寺の伽藍配置が日本で一番古い配置であった。四天王寺の伽藍配置は塔と金堂が一つずつ一直線に並べた配置であり、この一直線に並べた伽藍配置は四天王寺式とされる。飛鳥寺式は、四天王寺式が最も古いとの定説を覆すものとなった。また、飛鳥寺式と似た伽藍配置の寺が、高句麗の都平壤にある。金剛寺（こんごうじ）また清岩里（せいがんり）廃寺と呼ばれている。飛鳥寺と平壤清岩里廃寺が似ている伽藍配置というのは、塔を囲むように、三つの金堂がある。しかし、塔は八角形である。百済の渡来人により作られた飛鳥寺であるのに、伽藍配置という寺院の根源に関わる要素が百済的なものではない。この点には諸説あるが、中国、朝鮮でも古代寺院の発掘が進みつつあるため、今後真相が明かされることが期待されている。

伽藍配置からは、朝鮮半島の進んだ寺文化を見習い作られたことがわかる。飛鳥寺式が基本になるということは、数年後、同じ飛鳥にあり天智朝の建築と考えられる川原寺の伽藍配置が、塔の北と西に金堂のある形式であることが明らかになって、さらに確かめられた。つまり飛鳥寺式から東金堂をとると川原寺式になる。図8で示すように、右に行くにつれ新しく作られた寺である。造営開始年は飛鳥寺が588年、四天王寺が593年、法隆寺が607年である。飛鳥寺を見ると、上記で説明をした通り、塔を中心に囲むように金堂が

3つあり、中門、塔、中金堂、講堂と一直線に並んでいることがわかる。次に四天王寺は金堂が1つであり、これも、中門、塔、金堂、講堂を一直線に並んでいる。この形は飛鳥寺式の西金堂と東金堂を取ると四天王寺式になる。次に法隆寺も金堂が1つだが、塔と横に並んでいる。この形は四天王寺式の塔と金堂を横に並べると法隆寺式になる。このように飛鳥寺式が基準となったことが説明できる。

図8. 伽藍配置



出典： [http://www.cnw.ne.jp/~totoi/note/asuka\\_era.htm](http://www.cnw.ne.jp/~totoi/note/asuka_era.htm)

## 2. 瓦

屋根瓦と今も使われている瓦の語源は諸説あり、代表的なものは、日本書紀の中で甲冑（かっちゅう）の事を「カワラ（伽和羅）」と言い亀の甲羅のように固く上を包むものの意味で、その事から日本では屋根瓦は「カワラ」と言うようになったのではないかという説と、日本では土を焼いて固めた土器類を「カワラケ」と呼んでいることから、文字ってカワラになったのではないかという二説である。

瓦発祥は明確ではないが、現存する瓦の最古のものは中国のものである。西周時代初期(今から2800年以前)のことである。日本に伝わったのは、588年ごろ仏教が渡来人により伝わった。瓦は船に乗せて運べば、重いので船ごと沈むため、瓦職人が渡来し、古墳などを利用して窯を作り、日本の粘土を用いて瓦を作ったとされている。軒丸瓦の模様から、当時の瓦を大きく分けることができる。中国の統一王朝(漢)以降の南北分裂により、瓦製作のスタイルに大きく2つの流派である。南北の違う種類を本論文は、南朝スタイル・北朝スタイルと書く。二種類瓦の特徴として、南朝スタイルは瓦に掘られている花の花弁が単弁（花弁が1重、図9参照）であり、北朝スタイルは花の花弁が複弁（花弁が2重、図10参照）

であるのが特徴である。

当時の倭国に初めに伝わったのは南朝スタイルの単弁の瓦であった。飛鳥寺の発掘の際見つかった瓦の単弁の模様から二種類に分けることができる。それが、花組と星組である。星組が日本に伝わり、最初のモデルになったとされている。花組と星組の違いは、軒丸瓦の模様で分けることができる。花組は軒丸瓦の模様の花びらの先端に切り込みがある。星組は花びらの先端に小さな珠点がある。

図9. 南朝スタイル(単弁)



図10. 北朝スタイル(複弁)



撮影：勝山義弘 飛鳥寺境内

当時の倭国に初めに伝わったのは南朝スタイルの単弁の瓦であった。飛鳥寺の発掘の際見つかった瓦の単弁の模様から二種類に分けることができる。それが、花組と星組である。星組が日本に伝わり、最初のモデルになったとされている。花組と星組の違いは、軒丸瓦の模様で分けることができる。花組は軒丸瓦の模様の花びらの先端に切り込みがある。星組は花びらの先端に小さな珠点がある。

日本の瓦は588年(崇峻天皇元年)仏教伝来より36年後、百済から「麻那文奴・陽貴文・布陵貴・昔麻帝弥」4人の寺師と二人の寺工と1人の露盤師が渡来し、寺造りと共に瓦が作られた。日本最古の瓦は飛鳥寺(法興寺)とされている。しかし、1196年に燃失し、その後調査発見された出土瓦が世界最古の瓦になる。現存は、710年、都を飛鳥から平城に移した際、飛鳥寺(法興寺)の瓦は元興寺に移されて、その瓦は今でも使われている。図11は奈良にある元興寺の瓦を撮影したもので、左側の建物が極楽堂、右側が禅室である。極楽堂の瓦が現存のもっとも古代瓦である。色の違いは瓦の製作技術が違うことを表している。基本的にその焼き方に違いがあるからである。多数の職人が焼いていることが推測できる。仕様は平瓦と丸瓦を並べたもので、現在でも使われている本瓦葺きとほぼ同じである。

現在は、雪の降る地方など、各地方ニーズに合わせ多種類の瓦がある。だが、昔ながらの瓦を使った家もある。瓦技術は進化しつつあるが、約1400年間、基礎は変わっていない。

図 11. 元興寺 日本最古の瓦



撮影：勝山義弘 元興寺瓦



飛鳥寺は日本とアジアが力を合わせた最初の共同プロジェクトの集大成である。日本が他国の技術・思想を受け入れたということと、他国が日本に技術・思想を伝える双方の関係が必要である。当時の日本とアジアはその関係が成り立っていた。そこには多様な「アジアの共通の価値観」があると研究を通して実感することができた。

飛鳥寺が建設される前に仏教が日本に伝わった。仏教はインドから中国、朝鮮半島に、そして日本と伝わった。この一つをみても、当時の人の思惑、政治理由があり、それだけでは説明できないなにかがある。それが飛鳥寺、建設技術、仏教伝来あり、多様な価値観が存在する訳である。

本章では、伽藍配置・瓦について調べた。瓦は約 1400 年前の歴史のある瓦の原点は飛鳥寺建設の際渡来人により伝えられたものであった。私たちの生活の根底の一部にアジアの知恵、技術があり、その上に今の私たちがある。

アジアとの共同プロジェクトにより当時の倭国は数多く得るものがあつたのだろう。それは、新技術だけでなく、渡来した人がいたため今の日本がある。伝達手段が乏しい当時の倭国・朝鮮半島の関係は、対立もあつたが、互いに共生ができたといえよう。現在、日本・中国・韓国の国交は良いとは言えない。約 1400 年前は共生できた。現在もできるのではないか、その道標になる歴史からみた研究である。

## VI. 飛鳥寺の基になった寺院

飛鳥寺の建設に携わったのは、主に百済（くだら）からの渡来人であるとされている。その渡来人が飛鳥寺を建設したとき、朝鮮の寺院を基に飛鳥寺を建設したという説がでてくる。しかし、飛鳥寺の基となった寺院はどれなのか、はっきりとした証拠は残っておらず、近代の発掘調査による出土品や跡から飛鳥寺との共通点を持つ数か所の寺院が特定されただけである。現在、飛鳥寺の基となったという説が出ている朝鮮寺院は、主に百済の王興寺（ワンフンサ）、定林寺（チョンニムサ）、高句麗の清岩里廢寺である。以下は、これらの寺院について調査し、分かったことである。

百済の寺院である王興寺址は、韓国の扶余（プヨ）にある蔚城山（ウルソンサン）の山腹に位置しており、現在では王興寺の建造物は残っていない。この周辺では発掘調査が行われている最中である。<sup>16</sup>

1934年に「王興」と書かれた瓦が出土したことで、現在の位置が特定された。1946年には高麗時代の石仏坐像も発掘された。2000年から毎年発掘調査が行われており、百済時代の創建伽藍の東西回廊址と寺城南辺の石垣、木塔址と推定される建物址の一部が発掘された。この発掘調査をもとに伽藍配置を推定すると、寺域の規模は東西回廊の最大幅は58.7m、南北長は80mと思われ、陵山里寺址と規模や形態が類似している。2005年と2006年の調査では、寺域の東側で百済時代の窯跡が10基ほど発見された。この窯で王興寺の瓦が焼かれたと考えられている。

王興寺が飛鳥寺の基になったとされる理由としては、発掘調査によって王興寺から出土した瓦や置物などが、飛鳥寺から出土したものと類似しており、出土した品の作られた年代や性質が同じであったためである。

同じく百済の寺院である定林寺址は、現在の扶余の中心地に位置する百済の代表的な寺跡である。五重石塔（国宝第9号）と高麗時代の高さ5.62mの石仏座像（宝物第108号）が現在まで残されている。当時の講堂はそのまま残ってはいないが、講堂跡は木造瓦葺き建物に復元されていて、内部に再建当時の高麗初期に造像された石仏座像の一部が残っている。

定林寺址は1979年から1984年にかけて全面発掘が行われ、定林寺は南北線上に中門・塔・金銅・講堂が並び、回廊で囲んだ一塔一金堂式の伽藍配置の寺院であったことがわかった。定林寺という名は、高麗時代の再建時の制作された平瓦に記されていた銘文「太平八年（1028）戊辰年 定林寺 大蔵當草」に由来する。しかし、定林寺という名が百済時代にも使用されていたかどうかは不明なままである。創建時期も泗泚城に都が移された直後の6世紀半ばとする説があるが、正式な創建年も不明である。

---

<sup>16</sup> 参考：遙かなり、百済の王都・泗泚城  
([http://www.bell.jp/pancho/kasihara\\_diary/2007\\_01\\_13.htm](http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/2007_01_13.htm))



定林寺からも王興寺と同じように飛鳥寺から出土したものと類似した品が発見されたため、飛鳥寺の基になった寺院であるという説が出ている。

高句麗の寺院である清岩里廢寺は、現在の北朝鮮の平壤にあり、平壤前期時代の王城とみられる清岩里土城のなかにある。八角建物を中心に、歩道で結ばれた3つの建物が北・東・西にあり、南に門がある配置であるが、八角建物址を塔址、北の大建物址を金堂址と推定し、一直線上に門・塔・金堂がならぶ伽藍が想定されたものの、東西の建物址の役割は不明なままであった。その後1956年の奈良県の飛鳥寺の発掘を経て、この伽藍配置があらためて注目され、東西の建物も金堂で、つまり一塔三金堂式ではないかとされるようになった。

飛鳥寺の東西金堂は特異な乱石積みの二重基壇で、下成基壇には小礎石を配していた。そこには軒先やひさしを支える柱が立っていたとみられるが、清岩里廢寺もそのような構造をもっていたものとみられる。

清岩里廢寺が飛鳥寺の基になったとされる理由としては、上記でもあるように建物の形式である。飛鳥寺も清岩里廢寺と同じ一塔三金堂式の伽藍配置であり、飛鳥寺を建設する際に建築様式として参考にされたのが清岩里廢寺ではないかという説がある。

飛鳥寺の建設に関しては、当時日本へ仏教を伝えた百済からの渡来人が飛鳥寺の建設に携わったという説が最も強い。しかし、飛鳥寺建設の頃には高句麗からの渡来人も日本に入ってくるようになり、百済からの渡来人と一緒に高句麗からの渡来人も交じって飛鳥寺の建設をしたという説も出ている。このことから、百済と高句麗の異なった仏教、又は建設様式がそれぞれ日本に入ってきたことで、異種の仏教が飛鳥寺を通して合わさったのではないだろうか。



しかし、フィールドワークを行い帝塚山大学との合同ゼミを行ったことで、これまでの考えが変わることになった。

飛鳥寺は清岩里廢寺と同じ一塔三金堂式の伽藍配置であるが、帝塚山大学の清水昭博教授（以下、清水教授）によると、配置は似ているが中心にある塔の形式が飛鳥寺とは異なるそうだ。そして、百済の寺院は一塔一金堂式であるが、最近では金堂が一つではない可能性も出てきているそうだ。

また、自らの研究では飛鳥寺と百済の寺院との共通点は出土品だけということだけしか分からなかったが、清水教授の話では出土品だけでなく、寺院自体の構造も類似している点が多いそうだ。特に塔心礎の構造は朝鮮半島の王興寺とほぼ同じである。

このようなことから、飛鳥寺の建設に携わった渡来人は百済と高句麗の両国から来たのではなく、百済からきた渡来人だけであったと考えられる。

## VII. 仏教とキリスト教 伝来の道

飛鳥寺に関わる仏教のみでなくキリスト教をとりあげる理由は、キリスト教も仏教同様、ある特定の地域に縛られず、特に聖職者を中心に教えを信ずる人々の信教であり、異文化地域の交流を含めたコミュニケーションでもあるからである。この類似点を持つ2つの宗教から紐説き、東アジアの共通価値を見出すことを狙う。

### 1. 仏教の歴史

仏教とはインドの釈迦（ガウタマ・シッダールタ）を開祖とする宗教である。キリスト教・イスラム教と並んで世界三大宗教の一つで、一般に仏陀の説いた教え、また自ら仏陀に成るための教えであるとされる。仏教の教え全体は、この世に偶然に起こることは何もない、という基本の教えの上に成り立っている。仏陀はすべてのことには原因があると教えており、これをカルマの法則と呼ぶ。仏教の師達は、植物を植えたらそれを刈り入れるには熟すまで待たなくてはならないのと同じように、カルマも時には熟すのに長い時間がかかり、今生でしたことが来生で実を結ぶとする。悪いことを行う人達が栄え快適な人生を送っているのを見かけるとしても、悪いことを行う人たちの蒔いている悪い種は遅かれ早かれ不幸を实らせるものであると信じている。カルマの良い種についても同様であり、良い種だけを植えるなら遅かれ早かれ良い収穫を得ることができ、良いカルマを奪うことは誰にもできないと考える。このように善も悪もすべては自分達の思いから生まれてくるというのが仏陀の教えである。良いことや思いやりのあることを思えば良いことや思いやりのあることをするものであり、これが功績の良い種（良いカルマ）となる。一方、暗く邪悪なことばかり考えていたり怠惰で思いやりのあることなどほとんど考えたりしなければ、良かれ悪かれその思いのような人生を送るようになる。全てのカルマは、悪い思い、良い思い、怠惰な思いのどれかから起こり、普通の人はみな幸福になりたいと思っている。仏教におけるカルマの法則とはこのような考えである。

仏教はインドで生まれた。前述のとおり、仏教の開祖は釈迦と呼ばれ、正式の姓は、ゴータマ・シッダッタという。紀元前 463 年ころに、釈迦族の中心地であるカピラ城にスッドーナ王の長子として生まれた。29 歳で出家して、修行者となり、6 年間苦行を実行したが、その無意味なことを知り、中インドのブッダガヤの菩提樹のもとで瞑想に入り、ついに悟りを開いてブッダ（仏陀、真理を覚った者）になった。その後、ガンジス川の中流域からネパールにわたる地域を歴遊して教化に努め、前 3 世紀マウルヤ王朝のアショーカ王の「仏教保護・宣布」政策によりガンダーラ地方にも広がる。紀元 1 世紀ころ、大衆部に新しい見解を加えるようになり、自らを「大乘」と称し、その後、(大乘) 仏教は主に中国の訳経僧の思惑によりガンダーラから西域を経て、中国、朝鮮そして日本へと広まった。

図 12. 仏教の伝藩



出典：「諸説世界史研究」の図に筆者が編集を加えたもの

図 13. 玄奘三蔵像



※東京国立博物館所蔵  
鎌倉時代重文

ここで玄奘という有名な訳経僧の一人を取り上げる。602年から664年に活躍した唐代の中国の訳経僧である。倭国本土、飛鳥に仏教が伝来したのが4世紀頃とされ、玄奘が活躍したのは6世紀始めである。従って飛鳥に仏教をもたらしたことには関係しないが、後にアジア全域ともいえる広い範囲で仏教を広め、後世に多大な影響を与えた人物である。彼の尊称は三蔵法師。629年に陸路でインドに向かい、巡礼や仏教研究を行って645年に経典657部や仏像等を持って帰還。大唐西域記はその時の旅行記である。以後、翻訳作業で従来の誤りを正し、いまでは、仏教の宗派の一つとなっている法相宗の開祖となった。

玄奘は、仏典の研究には原典に拠るべきであると考え、また、仏跡の巡礼を志し、貞観3年(629年)、隋王朝に変わって新しく成立した唐王朝に出国の許可を求めた。しかし、当時は唐王朝が成立して間もない時期で、国内の情勢が不安定だった事情から出国の許可が下りなかったため、玄奘は国禁を犯して密かに出国、役人の監視を逃れながら河西回廊を経て高昌に至った。高昌王である麴文泰は熱心な仏教徒であったことも手伝い、玄奘を金銭面で援助した。玄奘は西域の商人らに混じって天山北路を辿って中央アジアの旅を続け、ガンジス川を越えてインドに至った。ナーランダ大学では戒賢に師事して唯識を学び、また各地の仏跡を巡拝した。ヴァルダナ朝の王ハルシャ・ヴァルダナの保護を受け、ハルシャ王へも進講している。こうして学問を修めた後、天山南路を経て帰国の途につき、出

国から 16 年を経た貞観 19 年 1 月（645 年）に、657 部の經典を長安に持ち帰った。幸い、玄奘が帰国した時には唐の情勢は大きく変わっており、時の皇帝・太宗も玄奘の業績を高く評価したので、16 年前の密出国の件について玄奘が罪を問われることはなかった。

図 14. 訳経僧玄奘三蔵の歩んだ道



出典：青少年のための仏教入門 仏教へのいざない

では、仏教は中国大陸から朝鮮にどのように伝わったのであろうか。始めに高句麗に伝わったのは前秦の苻堅（在位 357-385）が順道を高句麗に派遣したのがはじまりとされている。その後当時高句麗を治めていた広開土王（在位 391-413）が高句麗全域に広めた。百済には高句麗と別で東晋から海を渡り摩羅難陀が仏教を伝えたとされている。その後百済全体に広まり、倭国と交友の深かった百済は、538 年、聖明王（523-554）の思惑により仏教を日本にもたらしたとされている。その渡った仏教は、仏像や經典として贈られ、伝わった。そして日本では、仏教が伝えられると、賛成と反対で対立した。仏教を受け入れようとする側の代表は、中国・朝鮮から渡ってきた渡来人系の蘇我氏で、受け入れに反対する側の代表は、物部氏であった。この問題は、蘇我氏の勝利により一段落する。崇仏派の蘇我氏が勝利したことで、仏教は急速に普及していく。推古天皇は、「三宝興隆の詔」を發布し、聖徳太子は「十七条の憲法」を制定し、その中で仏教を儒教と並んで政治の基本精

神に据えた。また、豪族の間では、各自の寺院が建立される。これらの寺院は、それぞれの氏族の祖先を祀る目的で建てられ、「氏寺（うじでら）」と呼ばれる。このように従来の祖先崇拜の延長として仏教が信仰される一方で、中国や朝鮮の最新の仏教教学の影響も見られる。聖徳太子は、『法華経』『勝鬘経（しょうまんぎょう）』『維摩経（ゆいまぎょう）』の註釈書を書いたとされており、その中で、聖徳太子は中国の註釈書を踏まえながらも、独自の意見を出すなど、仏教に関する高い知識を示している。現在では本当に聖徳太子が書いたのか疑問が持たれており、朝鮮から渡来した僧侶の影響が指摘されているが、当時の仏教学の水準の高さを示す重要な書物の一つとなっており、倭国には後世に多大な影響を与えたとされている。

## 2. 仏教の伝来

仏教はインドから中国に伝わった後、朝鮮に伝わってから高句麗、百済、新羅の3つの国に分かれ、それに伴って仏教も3つの国のそれぞれの特徴を吸収し、その後順番に日本に伝えていった。

朝鮮半島にあった高句麗・百済・新羅の三国のうち、仏教が伝来したのは高句麗が一番早い。『三国史記』には、372年6月に中国の前秦（ぜんそう）から仏像と経文を高句麗に伝えた、とある。高句麗の第17代目の王である小獣林王（しょうじゅうりんおう）は省門寺（しょうもんじ）と伊弗蘭寺（いふつらんじ）を建設した。高句麗の第19代目の王である広開土王（こうかいどおう）は、392年に平壤に9つの寺を建設している。百済は4世紀中ごろに国家となったと言われている<sup>17</sup>。最初の都・漢城（ハンソン）は、現在の首都ソウルを流れる漢江（ハンガン）の南にあった。

高句麗に仏教が伝わってから12年後の384年、中国の東晋（トウシン）から百済に仏教が伝えられた。『三国史記』では、385年に漢山に寺院が建設され、392年に仏法を崇信したと伝えている。

475年、漢城は高句麗の攻撃を受けて落城し、蓋鹵王（がいろおう、百済第21代目の王）をはじめ、城にいた王子らは皆敵の手にかかって殺害されてしまった。しかし、王族の一部が南に逃れてソウルから120kmほど南にある熊津（ウンジン）を都とした。それが現在の公州（コンジュ）である。武寧王（ぶねいおう）の時代の王都だった公州には、百済時代の創建とみられる寺院跡として大通寺、西穴寺、南穴寺の三カ所がある。

武寧王のあとを継いだ聖王（せいおう、百済第26代目の王）は、538年の春に都を泗泚（しひ：現在の扶余）に移した。聖王も仏教の導入に熱心だったため、百済では多くの寺院が建設された。聖王は日本では聖明王の名で呼ばれ、日本に仏教を伝えた百済王として知られている。泗泚城（しひじょう）時代に創建された寺院址（あと）として、定林寺址・

---

<sup>17</sup> 参考：遙かなり、百済の王都・泗泚城  
([http://www.bell.jp/pancho/kasihara\\_diary/2007\\_01\\_13.htm](http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/2007_01_13.htm))

王興寺址・金剛寺址・軍守里寺址・弥勒寺址・帝釈寺址などが現在までに確認されている。仏教建築文化の先進国となった百済は、新羅や日本の仏教文化にも大きな影響をあたえた。しかし、現在では百済時代の寺院が当時のまま残っているものはない。

朝鮮半島へ仏教が伝わった一連の流れをまとめると、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の三国のうち、仏教が伝来したのは高句麗が一番早く、372年に中国の前秦から仏像と経文が伝えられた。その後、高句麗は新羅に仏教を伝えた。

高句麗に仏教が伝わった12年後の384年、百済に中国の東晋から仏教が伝えられた。そして、百済が最初に日本へ仏教を伝え、後に新羅からも日本へ仏教が伝えられた。

高句麗と百済は、同じ中国であってもそれぞれ別の国から仏教が伝わり、そのため寺院の建築様式や瓦が高句麗と百済で異なっている。その異なった仏教がそれぞれ百済と新羅を通して日本に伝わり、日本で一つに融合されたのが現在の仏教であり、飛鳥寺であることが分かる。

では、彼ら渡来人はどのように日本本土へ渡ってきたのだろうか。当時、日本本土へ訪れる外国人のほとんどが自国の争いから逃れてくる人であった。隣国に比べ勢力の弱かった任那に住まう人々が新羅からの攻撃から逃れ、瑞山（そさん）を發ち九州を周るように瀬戸内海に侵入し、大阪湾へ上陸し、飛鳥に渡ったとされる。しかし、当時は争いが多く起こっており、任那だけでなく他の国の人々も日本本土へ逃れてきたとされる。そのため、必ずしも瑞山から自国を發つわけではない。1000年以上も前の話であり文献により発っている場所が違っている。彼らは任那からも百済からも来ていたのでないかと推測される。

では彼らはなぜ瀬戸内海のルートを通ってきたのであろうか。当時は外灯など目印にできる明かりはなく、地図も正確ではないであろう時代である。瀬戸内海は比較的温暖で降水量も少ないが、陸地を離れずに見える範囲の地形や山を目視しながら航海する「地乗り航法」という方法で渡ったとされる。この方法は7世紀頃、新羅との交流のために使われたルートであり、のちに日本へキリスト教をもたらしたフランシスコ・ザビエル一派もこの瀬戸内海を通して、京の都を訪れている。7世紀以前は通常夜間航海は行わなかった。理由は、瀬戸内海地域は地形が複雑で潮の流れが早い地域であるためである。そのため、瀬戸内海を航行する船は、途中で何度も潮待ちや風待ちを余儀なくされて、多くの日数を要したとされる。

図 15. 渡来人の倭国本土への侵入航路図



出典：八木荘司「古代からの伝言 日いつる国」を参考にして筆者作成

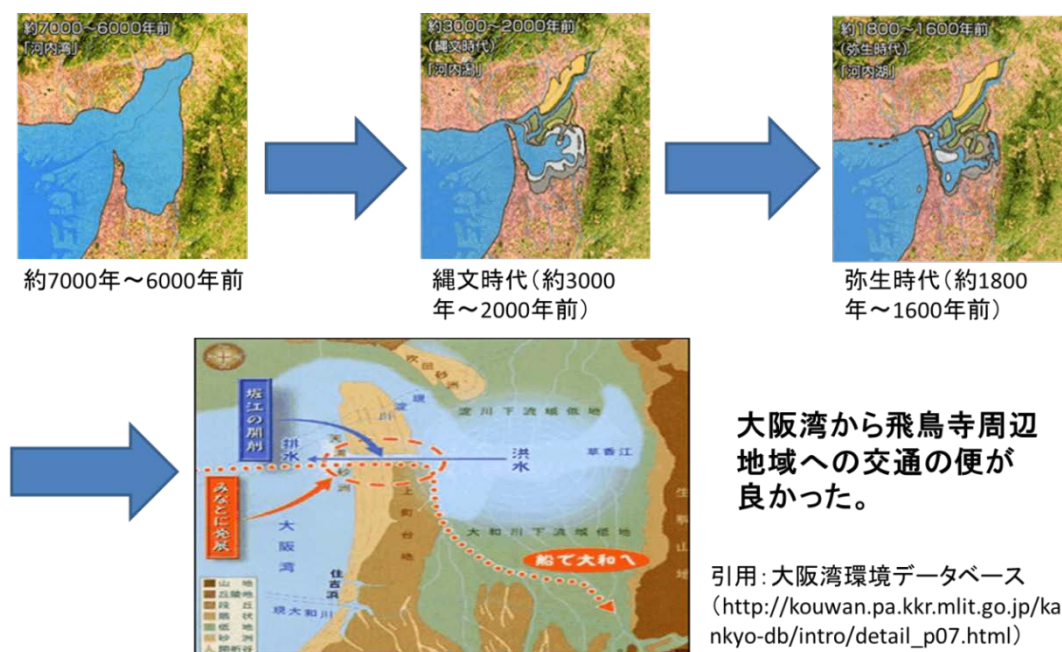
図 16. 瀬戸内海航路図 地乗り航法図



出典：環境教育テキスト 瀬戸内海—里海学入門

また、大阪湾は現在の大阪湾と地形が異なっていた。当時は海に大きく開いており、大阪湾から飛鳥まで大和川が流れていたのが大阪湾から飛鳥へいくのは容易であった。

図 17. 大阪湾の変化



### 3. キリスト教の歴史

次に、キリスト教について検討する。キリスト教の始まり、出発地点はどこなのかについては、イエスの宣教活動を始めた日、第1号のキリスト協会設立の日、パウロの宣教活動、等々の様々な解釈がある。キリスト教という宗教は2000年にも及ぶ歴史があり、その時代に応じて変化し、複雑化してきている。紀元前パレスチナで成立したキリスト教は、地中海地域を中心にローマ帝国時代に影響を与え、中世には中央ヨーロッパ全域に伝わり、近代では日本も含まれるアジア地域にまで影響は及んだ。本論文が飛鳥寺に関わる仏教のみでなくキリスト教をとりあげる理由は、キリスト教も仏教同様、ある特定の地域に縛られず特に聖職者を中心に教えを信ずる人々の信教であるからである。そのため、キリスト教の起源や成り立ちは少し割愛し、日本に伝わったとされる。近代1500年頃から日本という国とキリスト教はどのように変化してきたか見てきたい。

図18は、日本に初めてキリスト教を伝えた宣教師のフランシスコ・ザビエルらの航路経路図である。当時、世界宣教をテーマにしていたイエズス会は、ポルトガル王ジョアン3世の依頼で、ザビエルらは他のイエズス会員(ミセル・パウロら3名)と共に1541年4月7日にリスボンを出発した。8月にアフリカのモザンビークに到着、秋と冬を過ぎて1542年2月に出発、5月6日ゴアに到着。そこを拠点にインド各地で宣教し、1545年9月マラ



ッかに、さらに 1546 年 1 月にはモルッカに赴き宣教活動を続け、多くの人々をキリスト教に導いた。マラッカに戻り、1547 年 12 月に出会ったのが鹿児島出身のヤジロウという日本人であった。ザビエルが彼に出会わなければ、日本にキリスト教が伝わるのがもっと後になっていたと考えられている。

図 18. フランシスコ・ザビエルの歩んだ道（渡航図） 1



出典：カトリック中央協会

1548 年 11 月にゴアで宣教監督となったザビエルは、翌 1549 年 4 月 15 日、宣教師数人とゴアで洗礼を受けたばかりのヤジロウら 3 名の日本人と共にジャンク船でゴアを出発し、日本を目指した。一行は 1549 年 8 月 15 日に現在の鹿児島市祇園之洲町に到着した。1549 年 9 月には、伊集院城で薩摩の守護大名・島津貴久に謁見、宣教の許可を得た。しかし、貴久が仏僧の助言を聞き入れ禁教に傾いたため、1550 年 8 月「京にのぼる」ことを理由に薩摩を去り、ザビエル一行は肥前平戸に入り宣教活動を行った。同年 10 月下旬には、信徒の世話をトーレス神父に託し、ベルナルド（日本留学生）、フェルナンデス修道士と共に京を目指し平戸を出立。博多に滞在の後、11 月上旬に周防山口に入り、無許可で宣教活動を行った。周防の守護大名・大内義隆にも謁見するが、男色を罪とするキリスト教の教えが大内の怒りをかい、同年 12 月 17 日に周防を立つ。岩国から海路に切り替え、堺に上陸し

京都へ赴いた。図 19 でわかるように、キリスト教もまた瀬戸内海の航路を通り、仏教と同じくしてキリスト教もこのルートを用いて上陸していた。仏教伝来の時と違う点は近代ということもあり、国は栄え、大阪湾からは人伝に難なく、京都に行くことは容易であった。

図 19. フランシスコ・ザビエルの歩んだ道（渡航図） 2



出典：カトリック中央協会

1549年というのは、ちょうど宗教改革の時期に当たっており、ヨーロッパでは、カトリックやプロテスタントなどの宗派が激しい宗教戦争をしている最中であった。このことが、日本のキリスト教伝道にも陰を落としている。ザビエルの後で、ポルトガルからフランシスコ会の宣教師もやってきた。同じカトリックでありながら、イエズス会とフランシスコ会とは互いに競い合っていた。さらにこの頃スペインが日本を狙っていた。ザビエルはこれを察知して、日本への侵略を諦めるようにスペイン国王に手紙を書いたとされる。

さらに悪いことに、秀吉と家康の頃に、オランダからプロテスタントの宣教師が来日した。カトリックとプロテスタントの宣教師たちは、互いに、相手が日本に対して領土的野心を抱いていると告げ口し、非難し合ったりした。その上、仏教界からもキリスト教に対する反対が起こった。このために秀吉も家康もキリスト教に対して警戒を強めるようになり、キリシタン禁書令が出され（1630年）、キリシタンへの弾圧が行なわれて、それが島原

の乱となり（1637年）、ついに日本は鎖国を行なった（1639年）。このようにヨーロッパでの宗教戦争が日本での伝道の枷に繋がる結果になったと言える。

鎖国は日本を侵略から守ったのだから良かったという評価もできよう。しかし一方で鎖国が日本を世界から孤立させたから不幸な出来事が起きたのだという考えもある。当時のヨーロッパの宗教活動が、植民地主義的な性格を帯びていたのは否定することができず、日本が鎖国を行なったのは、政治的な視点から判断する限りでは正しかったといえよう。そうでなければ、日本も他のアジア諸国同様、欧米の植民地にされていた可能性は高い。宗教が、国家や政治と分離していなかった当時としては、この不幸は避けられないことだった。しかし、欧米の宗教戦争と幕府の鎖国政策の狭間にあつて、大勢のキリシタン（キリスト教信仰者）たちが、惨く長い受難の苦しみを受け、このためにおびただしい殉教者がでたことも事実であり、この人たちの信仰は、キリスト教の歴史の中で、大きな光芒を放っている。彼らの揺るぎない信仰をただ賛美するだけでなく、そのような不幸を二度と招かないように努めることが望まれよう。

キリシタン弾圧は、大きな傷を日本人の心に残した。それは、江戸幕府の反キリシタン政策によって、キリスト教は日本の国を危うくする邪教である、あるいは、白人が日本を侵略する道具であるという考え方が、日本人に根強く残ったことである。日本は、アジアの諸国の中で、欧米の植民地にならなかった珍しい国であるが、このために日本人がキリスト教だけでなく外国の思想にも心を閉ざすというマイナスの結果を生じたことも忘れてはならない。

#### 4. キリスト教の教え

キリスト教は、イエス・キリストを救い主として信じる宗教である。現在は大きく分けて、東方諸教会・カトリック教会・プロテスタントの宗派が存在するが、キリスト教の元は「父と子と聖霊」の三位一体を唯一の神として信仰する宗教である。その教えは一言で表すなら、救い主であるイエス・キリストに自分らの罪を浄化してもらい天国へ導いてもらうというものである。キリスト教にも仏教と同じく、天国と地獄という概念があり、人々は地獄を回避し、天国へ召されたいと考えられている。信じる者は神様に天国へ導かれ、神様自身が私達に御心のままに信じる力（信仰）を与えてくれるというものである。人間は自分を救うことができないと悟され、犯罪者がどんな慈善活動をしても、その良い行いは罪一つ取り消す事ができないとされている。聖書では、キリスト教というものは、神様自身がイエス・キリスト（神の子）を天国から地球へ送り、人類を救う必要があったとし、神様に罪を告白し、心から悔い改め、イエス・キリストが私達の罪のために十字架に架けられ、死なれたと心から信じ、イエス・キリストを心に受け入れるのであれば、私達の罪はすべて許され、神様（父）のみもと（天国）に入る事ができるとされている。「信じれば救われる」とはそう言う意味である。だが、イエス・キリストを信じた後好き勝手な生き

方ができるわけではない。いくらイエス・キリストを信じて、聖書に反する好き勝手な生き方をしていたらもちろん天国に入る事ができないのである。イエス・キリストを信じる者はイエス・キリストの教え（神の御言葉、聖書）に従って生きるべきとされ、それが本当のクリスチャン（キリストの信者）とされる。もちろん人間は弱いので毎日罪を犯す事があるが、だがすぐに神様に罪を告白し、心から悔い改めれば許されると考えている。大事なのは悔い改めの心であり、真剣に神様の教え（聖書）に従って生きようとする心であると考えている。そうすれば神様が信者を正しい道に導いてくれ、クリスチャンらしい人格（イエス・キリストの人格）になるように助けてくれる、そして死んだ後天国に行き、永遠に神様と一緒に生きることができるという考えである。

## 5. アジアと宗教

キリスト教の教えは一見、単純に思える。しかしキリスト教は旧約聖書のユダヤ教の教えと一体であり、思想という繋がりにおいてはギリシャ哲学とも一体である。さらにそのような西洋思想の流れから生じてきた自然科学の価値観も含めてとらえていく必要がある。その中からキリスト教だけを取り上げて何等かの解答を得ようとするには無理がある。キリスト教は西洋思想という大きなカテゴリーの一部としてとらえなければならない。

聖書の内容のすべてが文献学的にもその価値を認められているというわけではない。認められているのはその中の一部にすぎない。そこでその部分だけを理解すればいいとも思えるが、牧師によるとそれは非常に急進的な考えであるという。聖書はそれ自体が神から与えられた神の賜物であり、その一説一語を神の御言葉として大切に学んでいかなければならない。要点だけをまとめればよいというものではないということなのである。聖書には神の絶対啓示に対する絶対服従、律法（罪）に対する報い（罰）といった内容が非常に厳格に説かれているが、それもまた神の一樣相なのだと思う。神は理解しようとして理解できるというものではない。神をとらえようとする思い（分析）はむしろその本質的理解を妨げてしまう。

仏教もまた、キリスト教とは違った点も存在するが、似たような点がいくつも存在する。2つの宗教は同じく、ある特定の民族に限定されない宗教である。ではなぜ東アジア、とくに日本では根付かず、仏教なみに浸透しなかったのか。理由は大きく分けて3つある。

一つは当時の日本の国民性が原因である。日本の国民性の特性として挙げられるのは、高い道徳心と論理的思考である。これは当時日本本土にキリスト教という新しい宗教をもたらしたザビエルの日本人に対する印象でもあった。「日本人は理知的で我が民族より高い道徳性を持っており、倫理的思考。」ザビエルは江戸時代中期、旗本であり、様々な学問を修めていた学者・新井白石は「人類始祖の墮落を何故数千年も後になって購うのか」「我々

の先祖は救われないのか。それでは無能な神だ」<sup>18</sup>とキリスト教の理不尽さを攻め、宣教師達は反論できず、宣教が不可とされた。江戸時代の国民の既にあった道徳性はキリスト教の考えと矛盾しており肌合わなかった。さらに言論の自由な風習を持つ日本人たちの質問攻めに宣教師たちの多くは答えられなかったのが1つの要因であろう。

二つめは、日本人は八百万の神が基本の、多神教な考えをもっていた。それが急に見たこともない異民族が話す、これまでの考えを覆すような一神教の発想は民衆には受け止めきれないものであった。仏教の宗派の一つでもある浄土真宗の親鸞聖人の教えである南無阿弥陀仏では「ただ声に出して南無阿弥陀仏とばかり称うれば、極楽に往生すべきように思いはんべり。それは大に覺束なきことなり」<sup>19</sup>とする。日本ではすでに天国への見解は仏教で教えられていて、天国・地獄などの死生観に対するアイデンティティが既に確立してしまっただけである。

三つ目はキリスト教の伝えられた当時の歴史背景である。現在のキリスト教と異なり、この時代のキリスト教は欧州地域以外の異国民のキリスト教徒は人外とされ、奴隷のような扱いを受けてきた。ザビエルを始めとする宣教師の布教活動の思惑の一つに、新たな植民地の発見・奴隷の確保が目的があった。江戸中期には既に仏教が国教に成りつつあった。日本政府はそれを恐れて反キリシタン政策をうち、キリスト教は悪であるという考えを民衆に刻み、布教を進める国との鎖国を始めた。さらに、鎖国だけでなくキリスト教自身にも問題があった。欧州各地で起きた宗教戦争も一つの要因だと言えよう。当時キリスト教はカトリック教・プロテスタント教を始めとする様々な宗派で意見が争われていた。日本で布教を進める中、カトリック派の宣教師とプロテスタント派の宣教師の意見が矛盾しており、キリスト教を教わる日本人には深く理解できなかったのであろう。キリスト教が浸透しなかったのは日本だけでなく中国も同じであった。この時代、中国は儒教及び共産主義のイデオロギーによる、さまざまな形態及び強度の宗教活動が制限されていたため、当時はあまり熱心とはいえないものであったのである。

表3. 日本全国 宗教団体数統計

項目		宗教団体					
		神社	寺院	教会	布教所	その他	計
	総数						
系統		81,389	77,394	32,718	22,289	7,399	221,189
	神道系	81,290	18	5,565	1,021	910	88,804
	仏教系	32	77,333	2,195	1,918	3,865	85,343
	キリスト教系	—	2	7,234	871	1,174	9,281

<sup>18</sup> これからの日本とキリスト教 <http://www1.ocn.ne.jp/~koinonia/koenchaps.htm>

<sup>19</sup> 1 からわかる親鸞聖人と浄土真宗 <http://1kara.tulip-k.co.jp/>

諸教	67	41	17,724	18,479	1,450	37,761
----	----	----	--------	--------	-------	--------

出典：文化庁 宗教統計調査「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」

表4. 日本全国 宗教法人社数総計

項目		宗教法人					
		神社	寺院	教会	布教所	その他	計
系統	総数	81,211	75,964	23,117	292	1,271	181,855
	神道	81,131	12	3,581	131	231	85,086
	仏教系	24	75,911	994	92	400	77,421
	キリスト教系	—	—	4,130	25	352	4,507
	諸教	56	41	14,412	44	288	14,841

出典：文化庁 宗教統計調査「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」

表5. 外国人信者を含む日本国内に存在する信仰者数数値

項目		信者数
系統	総数	196,890,529
	神道系	100,770,882
	仏教系	84,708,309
	キリスト教系	1,920,892
	諸教	9,490,446

出典：文化庁 宗教統計調査「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」

表6. 各国民の無宗教に関するアンケート結果

	ギャラップ2007～ 2008年調査	電通総研 2006年調査
日本	73%	52%
中国	-	93%
韓国	54%	37%

出典：国別調査 宗教観についてギャラップ調査 電通総研調査

表3～表5は、文化庁が統計した日本国内に存在する外国人信者も含めた宗教団体・宗教信者数である。表6は無宗教に関する調査の結果である。ギャラップの調査は無宗教

に最も広い定義を用いている。質問は「宗教は重要ですか？」で、「いいえ」と答えた人の割合を示す。電通総研は「宗教を持たない」と答えた人の割合である。ギャラップの調査は 2007 年から 2008 年に、電通総研の調査は 2006 年に、現在、中国では確認されているキリスト教信者数は 6000 万人であり、推定で 1 億人を超えているのではといわれている。逆に日本では仏教信者数・キリスト教信者数ともに昔と比べ、無宗教者が多くなっている反面、日本人には食事を取る前に「いただきます」と手を合わせ、折に触れて神社や寺に足を運ぶ者が多く、神道ないし仏教の信者であるという見方もできる。また家がある寺の檀家であるため、本人の意識に関わらず統計上仏教徒として扱われている場合もある。このことから今と比べ当時の「宗教を信仰する」という感覚は、神を重んじるや、哲学を信ずるとは少しずれており、みんなが始めたから、やりだしたという集団意識からの始まりであったと考えられよう。仏教とは、他国から来た言葉の通じない異文化同士たちのコミュニケーションツールのような役割があり、飛鳥というのは当時の彼らにしては共通の思い入れがあり、たまたま知り合った異文化を支える共通価値であった。そして今でも形を残し築いている飛鳥寺ないし、初詣に行くこと、近いところで「いただきます・ごちそうさま」という言葉は現代の私たちにまで浸透している。仏教という宗教概念や飛鳥寺を始めとする仏教に関わる建造物は、子孫である現代を生きる私たちへ伝えようとした未来に繋げるネットワークだと考えられよう。

## VIII. 七福神

七福神とは福をもたらすものとされ、日本で信仰されている神である。日本、インド、中国の神で構成されており、恵比寿（えびす）、大黒天（だいこくてん）、毘沙門天（びしゃもんてん）、弁財天（べんざいてん）、布袋（ほてい）、福祿寿（ふくろくじゅ）、寿老人（じゅろうじん）が存在する。

七福神の起源は、恵比寿と大黒天が庶民の間で信仰され始めた平安時代末期といわれている。しかし、この時代の信仰、祈りとは共同体である国や村の五穀豊穡の祈願が中心であった。そのため、個人の願いを神や仏に祈る習慣はほとんどみられなかった。庶民は、恵比寿や大黒天など、自然に発生した神様への祈願を中心としていた。その後、室町時代には、貴族が衰退し国の実権を失っていた。また、応仁の乱などの戦乱により、貴族は経済的に悪化していた。室町時代は社会的に貨幣が流通するなど、商業が形作られた時代である。貨幣の出現によって、庶民の間で蓄財観念が芽生え始め、個人の利益を求めようとする意識が生まれた。共同体の祈願から個人の祈願へ変化し、一般庶民の七福神信仰が生まれたとされている。

七福神を簡単にまとめたものが下表である。

表 7. 七福神

名	起源	ご利益
恵比寿	日本	商売繁昌、除災招福
大黒天	インド	五穀豊穡、子孫愛育
毘沙門天	インド	開運厄除、大願成就
弁財天	インド	恋愛成就、学問成就
布袋	中国	夫婦円満、財宝賦与
福祿寿	中国	招徳人望、俸禄増加
寿老人	中国	長寿延命、富貴招福

表からわかるように、七福神は日本、インド、中国の神様で構成されている。

恵比寿は日本の神様である。伊邪那岐命（いざなぎのみこと）の第三子蛭子尊（ひるこ）といわれるが、大陸から来た異邦人とする説もある。漁業の神さまとして信仰されていたが、農民や商人にも信仰されるようになり、田の神、商業の神としても信仰を集めた。

大黒天は密教とともに日本へ伝わったインドの神である。真言宗や天台宗の最澄によって広められ、室町時代になると日蓮宗においても盛んに信仰されるようになった。元はインドの破壊神マハーカーラであり、マハーは「大いなる」、カーラは「黒や暗黒」を意味する。世界を破壊するときに黒い姿で現れる。また、不老長寿の薬をもち、力づくでも人を



救済するともいわれている。インドでは三宝を守り、飲食を豊かにする戦闘、破壊、支配の神であった。しかし、中国の南のお寺で台所の神に変化し、生産や食厨の神となった。日本では農産、福德の神である大国主命と集合し、五穀豊穰、福德の神と信仰されるようになった。大国主神と習合したのは、「大黒」と「大国」の音に通じているからだ。戦闘の神が日本で柔らかい表情をし、多様な姿が存在しているのはこのためである。インドから日本へ伝わる過程で図 20 から図 21 のように変化した。図 20 はインドのマハーカーラであり、図 21 は日本へ伝来する間に姿を変化させたマハーカーラ（大黒天）である。

図 20



図 21



出典 20 : [http://koktok.web.fc2.com/hom\\_page/sekibutu/aomen/mahakara.htm](http://koktok.web.fc2.com/hom_page/sekibutu/aomen/mahakara.htm)

出典 21 : <http://blog.livedoor.jp/karasakiac/archives/3794328.html>

毘沙門天はインドの神である。北の方角を守っており、気を払い災難や病を除くとされる。一方、富と地位を授け、願成就を果たす神としても信仰を集めている。妃に美と福德の神、吉祥天をもつことから、福をもたらすものともされる。

弁財天はインドの水の神である。学問、芸術、知恵の神として信仰され日本に伝来した。当初は弁才天であったが、吉祥天（きつしょうてん）と混同し、弁財天と名前が変化したため、福德・財宝賦与の神とされるようになった。

布袋は開運・良縁・子宝の神である。七福神の中で唯一実在した人物。仏教の僧、弥勒菩薩の化身とされている。

福祿寿は中国の道教から伝わり、南極星の化身といわれる。名前の由来は福（幸福）、祿（俸祿）、寿（長寿）の三徳を授けるものからである。

寿老人も中国の道教から伝わり、南極星または寿星の化身と言われている。健康、長寿、幸福の神様である。

七福神の信仰がされ始めた平安時代では密教が栄えていた。平安時代後期では浄土教、浄土信仰が貴族と庶民に広まっていた。末期では浄土信仰が地方にも広まり、各地方で阿弥陀堂が作られていた。

平安時代末期に七福神が生まれた背景には、天災による飢饉が多発していたことが関係していると考えられる。表8は七福神ができる前後に起きた天災をまとめたものである。この表から天災の影響で飢饉が多発していることがわかる。本来、豊穰の神ではなかった恵比寿や大黒天が豊穰の神として信仰されるようになったのは、天災によって起きた飢饉をどうにかしたいという農民の願望が信仰の内容を変化させていったのではないだろうか。

表8

時代	西暦	天災
平安時代	1108	浅間山噴火
	1112	浅間山噴火
	1134	長承の飢饉
	1155	久寿の飢饉
	1179	火災善光寺焼失
	1181	養和の大飢饉
鎌倉時代	1199	鎌倉で大地震
	1201	東国に大暴風雨
	1202	鎌倉で大地震
	1214	鎌倉で大地震
	1231	寛喜の大飢饉
	1239	加賀白山噴火し白山権現焼亡
	1258	正嘉の飢饉
	1268	火災善光寺焼失
	1293	鎌倉大地震
	1313	年火災善光寺焼失

七福神を通して、日本は昔から柔軟に多くのものを取り入れていることが明らかになった。七福神は、平安時代にインドや中国の神様を取り込み、当時の情勢に沿ったご利益があるものとして変化してきている。また、神様を7人で一つのまとまりとしている。これより、日本には柔軟な受容性、型にはまらない多様性があると考えられる。神仏習合など神と仏、神社と寺院を混ぜてしまういいかげんさもそのためだろう。

飛鳥寺を建立時も他国の宗教や文化、寺の建築技術を用いている。他にも中国大陸より伝わった漢文を元に仮名文字を作り上げている。現代でも多くのものを受け入れ、日本流に変換し取り込んでいる。このような日本が持つ柔軟な姿勢が5世紀以降、他国の文化を

自国のものとして集大成させることを可能にしたのではないだろうか。

七福神は、日本が受容性と多様性に富んでいることを示している。七福神は、ごく一部の優れた人物の中で生まれたものではなく、一般庶民の信仰が起源となり出来上がったものだ。一般庶民ですらも異国の神様や宗教を受け入れ、独自に変化させる受容性。複数の国から寄せ集め、多くのものを混ぜ合い構成する多様性を持っていたということになる。多くの人々が持っている価値観二つが混ざり合い、七福神信仰ができあがったのだろう。つまり、日本らしさとは七福神に表れているのではないだろうか。

岡倉天心は「アジアは一つ」と提唱していたが、この考えは違うのではないだろうか。ユーラシアの風を受け、雑多なもので溢れている日本だけをとっていても、アジアは単純化できるものではないと考えることができる。アジアは多様であるがために、自由自在に姿、形を変化させていく神様や宗教が存在するのだろう。

七福神が日本で信仰される以前から、中国では七福神と良く似た八仙人が広まっていた。

日本には「七福神」があるのに対し、中国には「八仙人」がある。「八仙人」とは、古くから中国で伝えられている道教の仙人八人（男性七人、女性一人の仙人衆）のことを指し、中国では広く知られている。

「八仙人」とは、李鉄拐（リ テッカイ）、鐘離権（ショウリ ケン、鐘離権ともいう）、張果老（チョウカロウ）、呂洞賓（ロドウヒン）、曹国舅（ソウコクシュウ）、漢湘子（カンショウシ）、藍采和（ランサイワ）、何仙姑（カセンコ）のことである。八仙人の物語は、古く唐の時代（618～907年）から伝わり、当時は既に「八仙図」「八仙伝」といった絵画や伝記があった。その後、構成人物が数度の変遷を経て、明の時代（1368～1644年）の小説家一呉元泰の『八仙東遊記』という小説によって、最終的に八人の名前が確定した。

この「八仙人」は、その出自と特徴により、それぞれ「老・若・男・女・富み・権力・貧困・低身分」の人物を代表しているとされ、社会のあらゆる階層の人々を内包しているため、今日に至っても中国の一般民衆から親しまれやすい存在となっている。中国では現在、「八仙人」を祭る道教の寺院が存在するほか、正月にあたる春節には「八仙人」に関わる絵などが飾り物として用いられることが多く、また戯曲など舞台劇では「八仙人」が良く題材として取り上げられるなど、「八仙人」の人気は非常に高い。

一方、日本の「七福神」との関係については、中国の一部学者は、「七福神」のうち、福祿寿、寿老人、福袋の三人は中国の出身であることと、中国人と日本人の数字に対する感覚の違いなどから「七福神」は「八仙人」より一人少なくなったのではないかと主張している。また、「七福神」の代表的な図柄としては、「宝船」というのがあるが、これは、中国の「八仙渡海図（八仙人が海を渡る）」という絵が元になっているのではないかという説もある。いずれにせよ、中国の「八仙人」と「七福神」との関係性について、これといった定説がまだ存在しないのが現状のようだが、隋や唐の時代における中国大陸と日本との活発な文化交流から鑑みると、何等かの関連性があつことは容易に想像できよう。

図 22. 八仙人



表 8 からは天災の影響で飢饉が多発していることがわかる。本来、豊穰の神ではなかった恵比寿や大黒天が豊穰の神として信仰されるようになったのは、天災によって起きた飢饉を無くしたいという社会の願望が信仰の内容を変化させていったのではないだろうか。このように考えると、日本は昔から柔軟に多くのものを取り入れていることが分かる。飛鳥寺を建立したときも他国の宗教や文化、お寺の製造技術を用いている。また、中国大陸より伝わった漢文を元に仮名文字を作り上げている。現代でも多くのものを受け入れ、日本流にローカライズし取り込んでいる。しかし、この日本流という価値観の受け入れ方が他国の価値観との相違を生み、各諸問題に繋がっているのではないだろうか。日本流に受け入れられた文化を元祖の文化だと考え、外交を行うことで小さな意見の違いが生まれ、積み重なり、肥大化し、解決が困難な問題に発展しているのではないだろうか。

## IX. 飛鳥寺の持つ意味のゲートキーパー論からの考察

我々は、「はじめに」でも述べたとうり、不穏な国際関係に終止符を打つべく「アジアの共通価値」を見出せるように、飛鳥寺という手掛かりを基にして、それぞれの筆者が飛鳥寺に関係する事物の研究をこれまでの各論で取り組んできた。

ただ、普通の古代史研究や宗教研究に陥ってしまっただけでは、現実の政治・経済などの事象に対して貢献できるような力を持つ論考にはならない。我々アジア班のメンバーは、全員が多摩大学の経営情報学部にも所属し、そこで経営情報学を専門的に学んでいる。本論文にてこれまで研究されてきた各章における試みは、既存の歴史学的な研究手法と同様な、文献とフィールドワークによって事実の記載をし、各章の筆者がそれに対して独自の考察案を付与するという手法によってきた。そこで、歴史学的なアプローチに加えて、さらに我々が学んでいる経営情報学的なアプローチを加えることで、新しい独自見解を得ることができるのではないかと考え、歴史学と経営学のシナジー効果を目指した独自研究に取り組んだものが本章である。これは、従来の歴史家ならば、そのような発想は持たないと思われ、またオリジナル要素の濃い新しい研究ではないかと考えられるからである。そうして生み出された対案は、東アジアの不穏な国際関係に対する有効な貢献になると考えられる。

そこで飛鳥寺の持つ意味を経営学における組織論の中に含まれる、ゲートキーパー論を駆使して考察する。

『「ゲートキーパー (Gatekeeper)」とは、直訳すれば「門番」のことだが、経営学では、組織や企業の境界を越えて、その内部と外部を情報面からつなぎ合わせる人のことを指す。組織の誰とでも何らかの形で接触しており、組織外部との接触も極めて多い人間である、とすることができる。』<sup>20</sup>とされる。つまりゲートキーパーとは、

- ① 専門知識を持つ人であり
- ② 組織の境界を越えて、組織の外部の情報と組織の内部の情報をつなぎ合わせる
- ③ 外部の情報の意味を翻訳して内部に展開し、内部の理解を助けて外部の力を利用できるようにする人である

「ゲートキーパーの概念は、1970年代にアメリカの経営学者 Allen によって提唱された。組織には特有の文化や考え方、用語などが存在し、それがコミュニケーションを妨げる原因になっているが、ゲートキーパーは組織の内外と接触する機会がきわめて多く、かつ高度な専門知識を持っているため、関連する情報をわかりやすく伝え、コミュニケーションを円滑にすることができる。たとえば、顧客の要望を把握しながら市場の動きを探り、研究開発部門や販売部門との交渉を進めることが可能だ」<sup>21</sup>とされるが、このゲートキーパー

---

<sup>20</sup> JMR 生活総合研究所マーケティングサイト

(<http://www.jmrlsi.co.jp/mdb/yougo/my08/my0843.html>) を参照。

<sup>21</sup> 前掲 JMR 生活総合研究所マーケティングサイト参照。

像から想起されるのは多摩大学の寺島実郎学長である。現代において寺島学長は、ついつい内を向きがちな日本人の意識を外へ外へと広げてくれる——組織の内部に外部の情報を翻訳してもらってくれる——という、文字通りのゲートキーパー的な役割を担っていると思われる。日本の中にある三井物産、多摩大学といった組織に、さらにはメディアにおける発信を通じて日本国民に対して、外部——アメリカや中国、中東などの各国情勢や世界情勢——の情報を翻訳して、内部の理解を助け、外部の力を利用できるようにしてくれていると考えられる。明らかにゲートキーパー的役割を果たしているといえるであろう。

では、いにしへの過去における飛鳥寺はどう評価できるであろうか。飛鳥寺は海外の新しい文化を受け止め、それを日本流に解釈して展開することを促進した。伽藍配置一つをとって飛鳥寺を考察しても、飛鳥寺は後の仏教建築の基本となっていることが分かる。このため飛鳥寺は、日本という国家の中で、アジアから入ってくる様々な価値観を受け止めて、日本の中に併せ持つという寛容な文化を築いた。

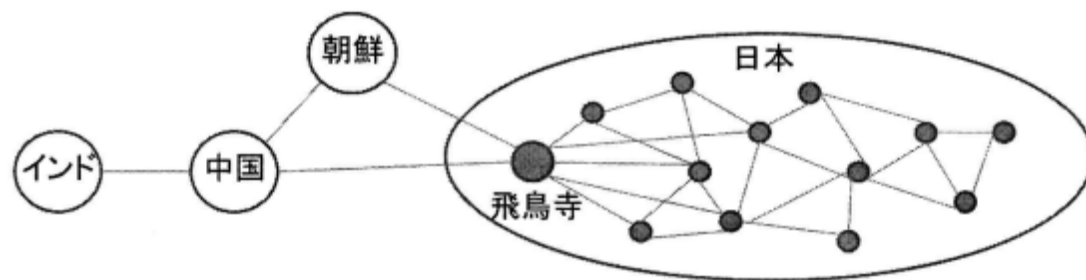
しかし、そもそもゲートキーパーというのは解釈し行動する人物を指すのであり、飛鳥寺自体がゲートキーパーというよりも、飛鳥寺を象徴として建立する際にゲートキーパー的役割を担った人物（＝蘇我馬子・厩戸皇子・推古天皇などの蘇我氏系）がいたと解釈するべきであろう。

日本は海で隔てられているという事実が、誰もが外部とコミュニケーションできるという環境を妨げ、それがゲートキーパー的役割の存在することを可能ならしめたといえる。これが日本の独自性につながる。一部の人間による上からの啓蒙もそうであるが、何よりも飛鳥寺を通じた文化の受容は、「良いものは良い」と積極的に摂取していく——良く言えば「寛容な」、悪く言えば「雑多」な——文化を築いたが、この寛容で雑多な文化が端的に表れている象徴的なものが「七福神」だと思われる。

歴史は一直線のものでも自己完結するものでもない。アジアは非常に多様であり一つの価値で説明できるものではないが、その多様性はアジアの持つ寛容さ（絶対神を置いて中東の非寛容とは明らかに異なるもの）でもある。日本は極東の存在として、そのような多様性——非常に色々なもの——を受け止めてきた。この独自性は、象徴としての飛鳥寺が形成しえたものと考えられる。このように、象徴としての飛鳥寺という存在が、中国や朝鮮から来るユーラシアの風を日本文化に内包しようとして受け止め、それを拒絶することなく受け入れるという、日本という国の「受容する力」を培うことにつながったのではないだろうか。

飛鳥寺を作らせたのは蘇我馬子であるが、実際に作ってくれたのは朝鮮からやってきた何百人もの渡来人であり、その構築過程そのものが象徴的意味を持つ。このように象徴的な役割を果たすものを現代でも構築することが出来れば、現代における東アジアの共通の価値として機能させることで、近隣の不要な摩擦を解消へと向かわせることが出来るのではないだろうか。

図 23. 飛鳥寺のゲートキーパー的役割の図解



出典：筆者作成

ここでいう象徴とは、現代においては——飛鳥寺そのもののような——建造物ではないだろう。近代の不幸を乗り越えて、アジアの有効を導くような何かが必要である。例えばヨーロッパにおける EU のようなもの、AU (Asia Union : アジア共同体) や、1997 年 7 月、当時の橋本龍太郎 (元) 首相が経済同友会で行った「太平洋から見たユーラシア外交」<sup>22</sup> のような発想で NATO に対応する NEATO (North East Asia Treaty Organization : 北東アジア条約機構) をアジアに作ったらどうであろうか。信頼・相互利益・長期的視点という 3 原則に基づく日露・日中・日韓・日朝関係の構築、環境やエネルギーといった問題を含めた中国とロシアとの協調、中国・朝鮮との歴史認識問題の妥協点を探るための共通の歴史教科書作り、そして「シルクロード地域」と括られた旧ソ連・中央アジアおよびコーカサスにおける新独立諸国との政治対話、経済ならびに資源開発、核不拡散や民主化・安定化による平和といった分野での協力を提唱してみてもよいのではないだろうか。このような近隣諸国との友好的な関係は、世界平和への貢献を意味するであろう。

しかしそのためには、複数の組織とつながることが出来る国家的ゲートキーパーがまず必要になる。そのような現代の国家的ゲートキーパーに求められる機能は複数ある。

一つめは「アジアと向き合い、声をあげる」ことである。アジアと向き合い、声をあげることができなくては、日本とアジアをつなぐことはできない。アジアと向き合うということは、まずユーラシアの風を受けてここまで培ってきた日本の文化とも向き合うということである。自国のことを知らないではアジアとは向き合えないだろう。日本もアジアの一部である以上、アジアの影響下にあることは言うまでもない。そこで日本に初めてアジアの影響が及んだと思われる仏教伝来による日本初の寺院、飛鳥寺をヒントに本論文の研究を参考にしたい。

二つめは「国内と国外を幅広い視野 (大人の視点) でつなぐ」ことである。そのためにはグローバルに物事をとらえて、ローカルに行動を起こす、真のグローバル人材でなくて

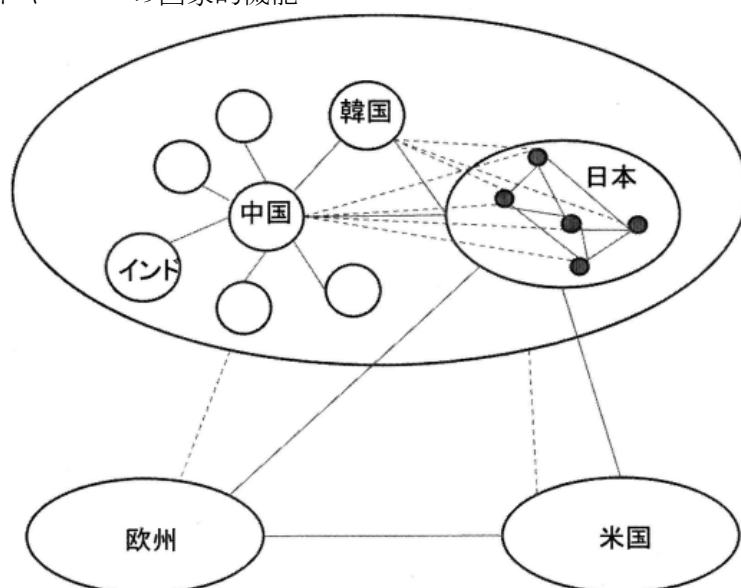
<sup>22</sup> 湯浅剛「ブリーフィング・メモ 安倍政権の対外・安全保障政策におけるユーラシアの位置づけ」『防衛研究所ニュース』(2013 年 8・9 月号)、防衛省防衛研究所、2013 年を参照。 [http://www.nids.go.jp/publication/briefing/pdf/2013/briefing\\_179.pdf](http://www.nids.go.jp/publication/briefing/pdf/2013/briefing_179.pdf)

はいけない。世界の潮流をとらえて、自分の立つ足元——自分が帰属する社会——に対して貢献することが始まりである。世界潮流から取り残された「内向する日本」であってははいけない。「2013年の日本へと視線を放つと、「株価が上がった」と内輪の祭りに興じ、「近隣の国には侮られたくない」という心理に鬱々とする思考停止状態にある日本は、大方のメディアも時代と対峙する緊張を失い放心の中にあるとさえいえる」<sup>23</sup>時代と対峙する緊張感を持って「内向する日本」の空気から脱却する必要がある。

三つめは「きちんとアジア諸国の主張を解釈し、翻訳して伝え主張する」ことである。近隣との相互理解・交流への踏み込みが、21世紀を主導するビジョンや構想を実現させるのに必要である。そのためには、相手の言い分を虚心坦懐に理解しようとする素直な目線と、分かりやすく翻訳できる強靱な思考力・知性と謙虚な自己省察が必要である。2013年の流行語大賞に「ヘイトスピーチ」という語が顔を連ねている、ナショナリズムに目が曇ると外国の主張を素直に聞くことが出来なくなる。近隣との相互理解と交流なしに21世紀の希望はありえないであろう。

では果たしてグローバルネットワークの中で、飛鳥寺が果たしていたゲートキーパーに代わる役割は必要であろうか。必要だとすればどのような主体がどのように担うのだろうか。今の日本には、アジア諸国との関係においてゲートキーパーが欠けていると思われる。ネットワークが発達し、組織の境界を越えたコミュニケーションの担い手が増加してコミュニケーションが頻繁になると、却ってゲートキーパー的役割は無くなってくる。だが、それが深い意味での相互理解を困難にしている。一般的組織でゲートキーパーの役割の重要性が主張されるように、国家間関係においても、学問領域においてもゲートキーパー的役割の重要性は現代でも同じではないかと考える。

図 24. ゲートキーパーの国家的機能



出典：  
筆者作成

<sup>23</sup> 岩波書店「世界」2013年11月号 寺島実郎「脳力のレッスン139」より参照



## X. 結論

経営学の組織論における「ゲートキーパー」とは、直訳では「門番」という意味だが、経営学では組織や企業の境界を越えてその内部と外部の情報を翻訳してつなぎ合わせる人物のことを指す。「はじめに」でも述べた通り、日本においては飛鳥寺が、蘇我氏<sup>24</sup>や渡来人といった人々により行われた最初の「日中韓の国家間プロジェクト」だと考えることができる。さらに飛鳥寺はユーラシアの風を受けて大陸の文物を受容し、異文化が接触する国際性に富んだ文明化の総合センターとしての役割をも果たしていたことが各章を見ることで分かると思われる。

飛鳥寺は海外の新しい文化を受け止め、それを日本流に解釈して展開することを促進した象徴的な存在である。伽藍配置一つをとって飛鳥寺を考察しても、後の仏教建築の基本となっていることが分かる。このため飛鳥寺は、日本という国家の中で、アジアから入ってくる様々な価値観を受け止めて、日本の中に併せ持つという寛容な文化を築いた。このような象徴的意味合いを飛鳥寺は包含している。

したがって、多様なアジアの共通価値の中の一つである飛鳥寺を手掛かりに日本とユーラシアの交流を考察していくことで、現在の不穏な国際関係に終止符を打てるのではないかと仮説を立てた。

そこで我々は飛鳥寺という手掛かりを使って日本とユーラシアの研究に取り組んだ。

II章「飛鳥寺とは」の章では、まずこの論文のタイトル「日本とユーラシアの交流——飛鳥寺を手掛かりに——」の中にある「飛鳥寺」について掘り下げた。飛鳥寺を建立した人物は蘇我馬子であり、建立した理由は物部守屋との戦争における勝利祈願であった。飛鳥寺は、用明2年（587年）から推古4年（596年）に寺院の造営を終えた後、推古13年（605年）に飛鳥大仏を完成させて納め、18年かけて造営された。この飛鳥大仏を実際に奈良のフィールドワークで観察したところ、それまでに見たことのある仏像とは全く違った顔立と雰囲気をしており、3メートル近くある体躯がもっと大きく感じられた。非常に不思議な佇まいをしているのである。

III章の『「アスカ」の由来』では、『アスカ』という言葉の由来は、仏教が伝えられる間に通ったインド、中国、朝鮮の各国の文化、そして日本の飛鳥寺の建設当時の地形や時代背景が反映されているものだという事が分かった。これらの各説から考察するに、飛鳥寺は仏教の寺院であるが、『アスカ』という言葉は仏教との直接的な関係性は低いと考えられる。

IV章「飛鳥寺の建立に携わった人々」の「1. 蘇我氏と物部氏」では、主に飛鳥寺を建てた蘇我馬子に対して焦点をあてている。同様に蘇我馬子と敵対していた物部氏にも同じくあてている。用明天皇の死去による後継者争いという政治的動乱がこの二つの氏族の争い

---

<sup>24</sup> 血縁関係における蘇我氏系という意味である。蘇我馬子や厩戸皇子、推古天皇を含む。

の発端であり、これが終息したその後、推古天皇・聖徳太子・蘇我馬子を中心とする安定した体制が確立することにより、仏教の崇拝が推進されていく。このような歴史の流れが飛鳥寺と仏教——というユーラシアの風——が日本に根付く時勢として機能していく。「2. 聖徳太子」では、6世紀後半から7世紀前半にかけて蘇我氏と同様に、他国からの文化を積極的に取り入れようとしていた飛鳥時代を象徴する重要な人物である聖徳太子について焦点をあてている。当時の隋や百済、新羅との交流を行い、仏教が広まるきっかけを作った人物は蘇我氏である。しかし、蘇我氏は仏教が広まることに熱心ではあるが、積極的に行動はせず消極的であった。一方、聖徳太子は仏教を広めることに尽力をつくした。彼は、仏教を根底に置いた政治体制、中央集権国家の実現を目指しており、また仏教書「三経義疏」を著すなど、大陸から伝わった仏教を分かりやすくまとめた書籍を作り、日本に仏教を広める基礎を築いた。お互いが共存するために許容し合う蘇我馬子と聖徳太子の関係は、友好的とは言えないが効率良く成長、発展させていくために関係を持ち続けている日中韓の現状に被るものがあると考えられる。この二人をより深く探ることで、現代の日中韓の関係を改善する糸口が見えてくるのではないだろうか、という課題が残った。

V章の「飛鳥寺と渡来人」では、伽藍配置・瓦について研究した。飛鳥寺の伽藍配置を見ると、その後の寺院建築の基本となったことが判明した。瓦は、約1400年前に飛鳥寺建設の際に渡来人により伝えられたものであった。私たちの生活の一部の根底にアジアの知恵、技術があり、その上に今の私たちがある。アジアとの共同プロジェクトといえる飛鳥寺の建設により、当時の倭国は数多く得るものがあつたのだろう。現在のような電子機器や正確な地図のない時代に、よくこのような人材の移動ができた我々は驚いた。当時の倭国・朝鮮半島の関係は、対立もあつたが互いに共生ができていたといえよう。現在、日本・中国・韓国の国際関係は良いとは言えないが、約1400年前は共生できたことから現在もできるのではないかと考えられる。その道しるべとなる可能性が、過去の歴史から垣間見えた研究であつた。

VI章「飛鳥寺の基になった寺院」では、飛鳥寺のルーツを探究した。飛鳥寺の建設に携わつたのは、主に百済からの渡来人であるとされている。その渡来人が飛鳥寺を建設したときは、朝鮮の寺院を基に飛鳥寺を建設したという説がでていいる。しかし、飛鳥寺のもととなった寺院はどれなのか、現在でもはっきりとした証拠は残っていないが、発掘調査による出土品や寺院跡から飛鳥寺との共通点を持つ数か所の寺院が特定されただけである。

VII章「仏教伝来の道」では、インドで興りシルクロードを通して中国へ入り、さらに朝鮮へと広まり、最後にユーラシアの掃き溜めである日本へとたどり着いた、ユーラシアのダイナミズムが体現されていると考えられる仏教について掘り下げた。当時の渡来人たちはどのように日本へと渡ってきたのかを見てみると、世界史的視点から歴史という関係性の結びつきについて改めて認識させられる。また朝鮮の仏教を深く見てみると、同じ仏教一つをとってみても明らかに異なっている。その異なる仏教が日本へと渡ることによってさらに融合・受容し、土着化していく。こうした大陸の人々の色が少しずつ加えられたバトンを

つなぎ届いた先が、この日本なのである。これらユーラシアの人々が、我々の一挙手一投足を見ているのである。

Ⅷ章「七福神」では、七福神を研究することで、日本人の良いものは良いとしてなんでも取り入れてしまうという——良く言えば寛容な、悪く言えば雑多な——文化が如実に表れていることが分かった。七福神は庶民信仰として始まり、当時は元の神話の象徴的な像から著しく乖離した存在が信仰された。しかし、この日本流にローカライズされた価値観の受け入れ方が他国の価値観との相違を生み、各諸問題に繋がっているのではないだろうか。日本流に受け入れられた文化を元祖の文化だと考え、外交を行うことで小さな意見の違いが生まれ、積み重なることで肥大化し、問題の解決が困難な状態へと陥っているのではないだろうか、といったローカライズに伴う小さな違和感について考えさせられた。

Ⅸ章「飛鳥寺の持つ意味のゲートキーパー論からの考察」では、我々アジア班のメンバーが専門的に学んでいる経営情報学の知識と飛鳥寺を通して培ってきた歴史学の知識を掛け合わせることで新しい知見が生まれるのではないかと考え、独自に研究・調査した。その結果、このアジアの不穏な対外関係に対する友好関係構築の手掛かりとして扱える具体的な対案を提示することが出来た。その対案はこの「結論」の終わりに繰り返して述べる。

このように各論を掘り下げることで、アジアの多様さに改めて我々は驚嘆した。日本人の中にはこれほど多様な価値観と混交した、良く言えば多様な、悪く言えば雑多な文化が根づいていると言える。アジアは多様であり、一つの価値では説明できない複雑さを持っている。日本はそのユーラシアの掃き溜めとしてアジアの多様さを柔軟に受け止めて、寛容な文化を築いてきた。この寛容さでアジアを柔らかく包むことはできないだろうか。

「はじめに」で述べたように、アジア経済が新しい次元へと入り、世界の経済がアジアへとシフトしていくのが現在の世界潮流といえるだろう。そして現在、アジアの国内総生産（GDP）は2013年に世界の3割に達し、日本、中国、その他がそれぞれ1割前後を占める。アジア開発銀行は「2050年にアジアGDPが2013年の約8倍に膨らみ、世界の52%を占めると予測した」。そのように経済が活発なアジアの国際関係を見てみると、胸に鎮痛が残るような気持ちになる。

2012年には日本、中国、韓国でナショナリズムが高揚していき、お互いの世論感情の悪化から「政冷経凍」と揶揄される戦後最悪の日中・日韓関係にまで陥ってしまった。こうした政治上で不穏な状況が続けば、日本とアジアの交流を妨げてしまうであろう。

そこで現代では、かつての飛鳥寺のような東アジアにおける国家間プロジェクトを起こすことで、東アジアのより緊密な関係を再構築することができると思われる。

現代では飛鳥寺のように建物のような実物ではなく、EU（European Union：欧州連合）やNATO（North Atlantic Treaty Organization：北大西洋条約機構）のようなブロック経済圏や同盟の共同体のようなものを参考に、AU（Asia Union：アジア共同体）やNEATO

(North East Asia Treaty Organization : 北東アジア条約機構) のようなモノを作り、信頼・相互利益・長期的視点という3原則に基づく日露・日中・日韓・日朝関係の構築、環境やエネルギーといった問題を含めた中国とロシアとの協調、中国・朝鮮との歴史認識問題の妥協点を探るための共通の歴史教科書作り、そして「シルクロード地域」と括られた旧ソ連・中央アジアおよびコーカサスにおける新独立諸国との政治対話、経済ならびに資源開発、核不拡散や民主化・安定化による平和といった分野での協力を提唱してみてもよいのではないだろうか。このような近隣諸国との友好的な関係は、世界平和への貢献を意味するであろう。

岡山大学ではキャンパスアジア事業という、日中韓の学生を集めて共通の歴史教科書を使って授業をするという取り組みが現在なされている。こうした試みは、今までの東アジアでは見られなかったが、アジアの共同体を実現するための着実な一歩となるであろう。日中韓の学生たちに同様な教育を施すことで不要な歴史認識問題のような摩擦も解消ないし、縮小化していくのではないだろうか。

しかし、このような取り組みも始まったばかりである。現にこのような構想を抱いて行動する国家的ゲートキーパーの存在は不可欠であろうと思われるが、とても足りない。アジア共同体のような構想を話し合う政府間も民間の交流の頻度もより増大させる必要がある。また、共通の歴史教科書をつくる試みはされているが、各国の学生が持つ歴史認識から議論が紛糾することも度々起きている。この構想を実現するための問題はまだまだ多く存在しているが、それは今後の課題としたい。我々の研究論文は、東アジアの安寧に貢献するため若干なりとも寄与できたと思われる。アジアの多様な価値観を胸に非寛容な行為をするのではなく、飛鳥寺が構築した多様性を認める寛容の精神でもってこれら諸問題にあたっていきたいと考える。

## 参考文献

### 参考図書

1. 寺島実郎「大中華圏 ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る」NHK 出版 2012/12/25
2. 石井研士『バラエティ化する宗教』青弓社 2010/10
3. 井上光貞『日本の歴史1 神話から歴史へ』中公文庫 2005/06/25
4. 宇治谷孟『日本書紀 全現代語訳(上)(下)』講談社学術文庫 1988/6/10
5. 遠藤周作『キリスト教ハンドブック 改正版』三省堂 2009/4
6. 大角修『イラストでわかるやさしい仏教 ブッタの教え、歴史をビジュアル解説』成美堂出版 2006/5
7. 門脇禎二『飛鳥 その古代史と風土』吉川弘文館 2012/07/01
8. 金岡秀友(監修者) 田代尚嗣(著)『面白いほどよくわかる仏教のすべて 釈迦の生涯から葬式まで～仏教早わかり事典』日本文芸社 2001/1/25
9. 河合敦『早わかり日本史』日本実業出版 2008/10/01
10. 川勝守『聖徳太子と東アジア世界』吉川弘文館 2002/12/01
11. 私市元宏『これからの日本とキリスト教』Booking社 2001
12. 久保田展弘『日本宗教とは何か』新潮選書 1994/6
13. 国史大辞典編集委員会『国史大辞典6 こまーしと』吉川弘文館 1985/01/01
14. 小林道憲『NHK ブックス 799 宗教とはなにか 古代世界の神』日本放送出版協会 1997/7
15. 五味 文彦(著), 鳥海 靖(著)『もういちど読む山川日本史』山川出版社 2009/09
16. 佐藤 信(編集), 高埜 利彦(編集), 鳥海 靖(編集), 五味 文彦(編集)『詳説日本史研究 改訂版』山川出版社 2008/08
17. 杉山二郎『仏像が来た道』青土社 2010/7
18. 曾根正人『聖徳太子と飛鳥仏教』吉川弘文館 2007/3/1
19. 高橋伸夫(編)『超企業・組織論—企業を超える組織のダイナミズム』有斐閣 2000/10
20. 武光誠『蘇我氏の古代史 謎の一族はどうして滅びたのか』平凡社新書 2008/05/15
21. 田村圓澄『飛鳥時代 倭から日本へ』吉川弘文館 2010/4/1
22. 直木孝次郎『日本の歴史2 古代国家の成立』中公文庫 2004/06/25
23. 直木孝次郎『歴史文化セレクション 飛鳥—その光と影』吉川弘文館 2007/5/20
24. 直木孝次郎『直木孝次郎古代を語る9 飛鳥寺と法隆寺』吉川弘文館 2009/6/10
25. 中牧弘充『グローバル化するアジア系宗教経営とマーケティング』東方出版 2012/1
26. 日本博学倶楽部『学び直す日本史 古代編』PHP 研究所 2011/03/29
27. ひろさちや『釈迦とイエス』新潮選書 2000/11
28. 保坂俊司(監修者)『史上最強図解 仏教入門』ナツメ社 2010/7/5
29. 三浦佑之『口語訳 古事記[神代篇]』文春文庫 2006/12/10

- 30.三浦佑之『口語訳 古事記[人代篇]』文春文庫 2006/12/10
- 31.水谷千秋『謎の豪族 蘇我氏』文春新書 2006/03/20
- 32.嶺重淑『キリスト教入門 歴史・人物・文学』日本キリスト教団出版局 2011/3
- 33.八木荘司『古代からの伝言 日いつる国』角川文庫 2006/9/22
- 34.木下 康彦(編集), 吉田 寅(編集), 木村 靖二(編集)『詳説世界史研究 改訂版』山川出版社 2008/03

#### 参考記事

- ① 岩波書店「世界 11月号」寺島実郎「脳力のレッスン 139」
- ② 岩波書店「世界 12月号」寺島実郎「脳力のレッスン 140」
- ③ 日本経済新聞「アジア跳ぶ(1)世界の5割経済圏、2050年GDP8倍、沸き起こる中間層」2013/01/01 朝刊 1ページ
- ④ 日本経済新聞「反日デモ、80都市超す、中国当局、抑制の動き、工場停止や店舗休業拡大」2012/09/17 朝刊 1ページ

#### 参考ウェブ

- イ) J-marketing.net 「マーケティング用語集 > ゲートキーパー」  
<http://www.jmrlsi.co.jp/mdb/yougo/my08/my0843.html>
- ロ) 防衛研究所 地域研究部アジア・アフリカ研究室 主任研究官 湯浅剛「ブリーフィング・メモ 安倍政権の対外・安全保障政策におけるユーラシアの位置づけ」  
[http://www.nids.go.jp/publication/briefing/pdf/2013/briefing\\_179.pdf](http://www.nids.go.jp/publication/briefing/pdf/2013/briefing_179.pdf)
- ハ) 青少年のための仏教入門 仏教からのいざない  
[http://todaibussei.or.jp/izanai/izanai\\_index.html](http://todaibussei.or.jp/izanai/izanai_index.html)
- ニ) これからの日本とキリスト教  
<http://www1.ocn.ne.jp/~koinonia/koenchaps.htm>
- ホ) 1からわかる親鸞聖人と浄土真宗  
<http://1kara.tulip-k.co.jp/>
- ヘ) 電通総研  
<http://www.dentsu.co.jp/dii/>
- ト) Gallup.com  
<http://www.gallup.com/home.aspx>
- チ) カトリック中央協議会  
<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/feature/xavier500/>
- リ) 文部科学宗教統計調査  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa07/shuukyoku/1262852.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa07/shuukyoku/1262852.htm)
- ヌ) 大阪湾環境データベース

<http://kouwan.pa.kkr.mlit.go.jp/>

ル) 遙かなり、百済の王都・泗泚城

[http://www.bell.jp/pancho/kasihara\\_diary/2007\\_01\\_13.htm](http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/2007_01_13.htm)

## Appendix 1. 故郷を見える旅——奈良フィールドワーク

### 1. はじめに

奈良市は、708年（和銅元年）元明天皇藤原京から平城京への遷都を詔し、唐の都「長安」を模倣して建造された。奈良市と西安市はかつて日中両国の首都として深い絆で結ばれ、この歴史的な因縁によって、1974年（昭和49年）、奈良市と陝西省西安市は友好姉妹都市関係を結んだ。1979年（昭和54年）、私の祖父は訪日団の一員として、西安市農業友好視察団は奈良などの町へ視察した。子供の時代、祖父の写真集が大好きだった、奈良の歴史と文化を調べていた。

奈良、見慣れないまたは詳しいところは、つまりどういう様子であるか。

日本、中国、朝鮮、東アジアの歴史根源は長いが、どこも似ている要素がある。今回、飛鳥寺研究のために、一泊二日の日程で奈良へフィールドワークに行った。奈良は、日本の古都として、文明の源流がここで生まれ育てた。実は、文明誕生のころから、異文化交流がずっと存在している。その遠い時代に、日中韓、さらにアジア文明はどう交流するか。同時に、我々は、その時代から学ぶことはあるだろうか。

### 2. 帝塚山大学（合同ゼミ）

帝塚山大学での合同ゼミでは、私たち多摩大学インターゼミアジア班は、これまでの研究成果を、帝塚山大学の学生たちは飛鳥寺に関連する発表を行った。両校の学生の発表の後、帝塚山大学の鷺森先生（古代史）と清水先生（考古学）からそれぞれのご専門に基づいてレクチャーをして頂いた。

帝塚山大学の先生と学生たちは歴史と考古学を専門とする方々であった。彼方の研究は非常に緻密である。飛鳥寺についての歴史的経緯、事件、人物との関係がはつきり整理されていた。飛鳥寺では、1958年から発掘が開始され、飛鳥寺の建物で使われた瓦、寺院の伽藍配置を復元した。また、朝鮮と中国の仏教寺院との比較のため、日中韓各地域で実地調査も行った。今回の合同ゼミは、大変勉強になった。

### 3. 飛鳥寺

飛鳥寺へ行き途中、平城宮跡を通った。漢唐時代の様式の建物、朱雀門、太极殿、唐長安城の同じ名前を付けた。紀元710年、平城京に遷都した。同じ時代に、中国は唐であった。唐の長安城は当時における周辺諸民族の模範的な都市であった。碁盤の目状の道路、南北を貫く大通り、北の政庁の位置、河川の配置といった特徴は平城京、平安京にも強い影響を与えた。平安初中期の詩文に、平安京を指して「長安城」と呼んだ例が見られる。ここに平安貴族の唐・長安への憧れが伺えた。

山々の間に、電車が通過していた。奈良県、日本国内では少数の海がない内陸県として、



歴史上日本の経済、政治、文化の中心である。更に、奈良の中心地域は、アスカ地方と言われている。明日香村はやはりアスカ地方の中心地域である。ここには、縄文時代の遺跡と、その上に築かれた飛鳥時代の遺跡とが、重なり合って存在しているところである。飛鳥寺はいろいろ遺跡の一つである。飛鳥時代を一口に言うと、中国、朝鮮からの仏教伝来に伴い、新しい文化を発展させた時代であった。政治、経済、社会ともに大変革が試みられ、天皇制律令国家へ飛躍するという意味において、日本国誕生の時代といえることができる。

今の明日香村、住民の一戸建は全て飛鳥時代の建築様式である。ある家は七福神を飾る。古典的、伝統的な日本風なものが溢れ、遺跡もよく保存している。現在の明日香村は全て歴史的風土保存地域、風致地区などに指定された村として、貴重な遺跡や埋蔵文化財の宝庫と言われている。あまねくゆきわたる遺跡が今も発掘している。ここから、振り返ると、当時はいかに繁栄かと考えられた。

飛鳥寺、今日の伽藍配置は中国の寺院と違う。小さい寺院の建築は典型的な日本式である。木結構建築、高さはなく、回廊も小さい。正殿に入って、必ず靴を脱がす。しかし、正殿の内部は中国の寺院と違いがない。飛鳥大仏は東アジアの顔、中国の仏像と同じである。以前、東京国立博物館を参観した。東洋館に、インドの仏像はインドの顔、中国、朝鮮の仏像と法隆寺館の仏像は全て東アジアの顔である。2000年前、仏教伝来し、中国で大乗仏教は発展すると同時に、本土化になった。後、朝鮮、日本へ広まった。一番驚いたのは、正殿の右側、一つ石碑があった。石碑の上、全部に古代漢語で、元興寺の縁起を書く。中国人、中学生以上のレベル人にとって、そのまま直接に読み、意味が理解しやすい。その時代、日本の文章は全て古代漢語を書いた。例えば、『日本書紀』を挙げる。今の中国人は読める。しかし、一般の日本人は読めないかもしれない。

その上、左側は韓国語の卷子がある。韓国語がわからない、内容は知らなかった。しかし、必ず飛鳥寺あるいは仏教についてのことだと思った。

#### 4. 元興寺（飛鳥寺の引越し先）

飛鳥寺の見学を終え、奈良市へ移動し、飛鳥寺の引越し先となった元興寺を見学した。

元興寺は「古都奈良の文化財」の一部として、世界遺産にも登録された。日本最古、飛鳥時代の瓦（極楽坊禅室・本堂）も見える。正殿の中、仏像の裏側に、壁画がある。その壁画を見ると、敦煌の壁画を思った。色と姿が敦煌の壁画に似ている。特に、下のほうが菩薩、敦煌壁画の飛天という姿がだいたい同じである。

側室の資料館に、散華の美という特別展があった。散華とは、華（花）を散布することである。仏教では仏を供養するために華を散布する。また花を散らす意味から転じ、死亡すること、特に若くして戦死する事の婉曲表現としても使われている。

中国では、「散花」と言う。仏教、道教にもこのような行事があり、源流は仏教である。または「天女散花」という四字熟語があり、それも仏教の物語である。

## 5. 奈良国立博物館（正倉院展）

正倉院展で、観光客は東京より多い。賑やか、歴史に興味がある人が多い。

飛鳥寺と同じ、古代の文章は全て漢語である。日本人より、中国人はもっと理解しやすい。例えば徳川家康家族の文書、寺院の収支表などのものは、中国古代の文書と同じである。

仮面、貴族たちの装飾品。唐の時代、全年は夜間通行禁止を行っていた。毎年元宵節しか解除しなかった。元宵節の夜、貴族たちは仮面を掛け、飾り提灯を見物した。

ここでだいたい同じものを見てあり、違和感がぜんぜんなかった。

## 6. 京都

奈良市は、708年（和銅元年）元明天皇藤原京から平城京への遷都を詔し、唐の都「長安」を模倣して建造されたとされ、面積は長安城の四分の一と言われている。奈良市と西安市はかつて日中両国の首都として深い絆で結ばれて、この歴史的な因縁によって、1974年（昭和49年）、奈良市と陝西省西安市は友好姉妹都市関係結んだ。

西安は私の故郷である。東海道新幹線は山々に通り抜け、自然風景と人文景観は故郷にとても似て、違和感が全然なくなった。

日本の建物は建築において、唐の様式の建物が多い。例えば、西安は13つ時代の都として、主な時代は漢と唐であった。今まで保存した建物は主な唐の建物である。大慈恩寺を代表とする寺院建築、華清宮を代表とする宮殿建築は唐の様式。奈良は「奈良の都」と呼ばれている。奈良時代、遣唐使たちは唐の文明を学んで、日本へ広まった。その中でも、漢字、政治制度、建築、宗教、文学などは日本に強い影響を与えた。奈良の平城宮跡、元興寺、東大寺など古代の建物は唐風である。

西安では、千年を経って、古建築を壊す場合が多い、資料も紛失し、文化遺産を保護しなければならない。古都の復旧を提唱していた。友好姉妹都市関係結んだ後で、1980年代から、奈良は提携している。日本の歴史、考古、古建築における専門家、学者は西安の文化遺産を保護する事業を支援している。日本では、特に奈良、京都、今まで完璧に保存した資料と実物が多くあるため、「唐の都」復旧と考古について研究は日中合作して進んでいる。「中国が失った伝統は、日本で保存した」という見方が存在する。

その上、日中友好を強化するため、西安と日本の奈良市の友好都市関係締結五周年を記念し、1979年7月1日、阿倍仲麻呂の記念碑は興慶宮公園に立てられた。興慶宮公園は唐の興慶宮の一部である。昔の興慶宮は玄宗皇帝の兄弟五人の王子たちの御殿として造営された。阿倍仲麻呂（あべのなかもろ、文武天皇2年698年～宝亀元年770年）は、奈良時代の遣唐留学生。姓は朝臣。唐で科挙に合格し、唐朝諸官を歴任して高官に登ったが、752年に今の国立図書館館長に当たる職にも就いた。日本への帰国を果たせなかった。その後も唐王朝の高級官僚として長安で活躍し、770年、73才で中国に亡くなった。中国名は仲満のち晁衡（朝衡）である。

## 7. 後書き

中国では、教員が学生と一緒にフィールドワークに行く機会が少なく、また経済や経営を学んでいる学生が歴史について研究調査を行うこともないため、私にとっては、今回のアジア班のメンバーとのフィールドワークは大変貴重な経験となった。

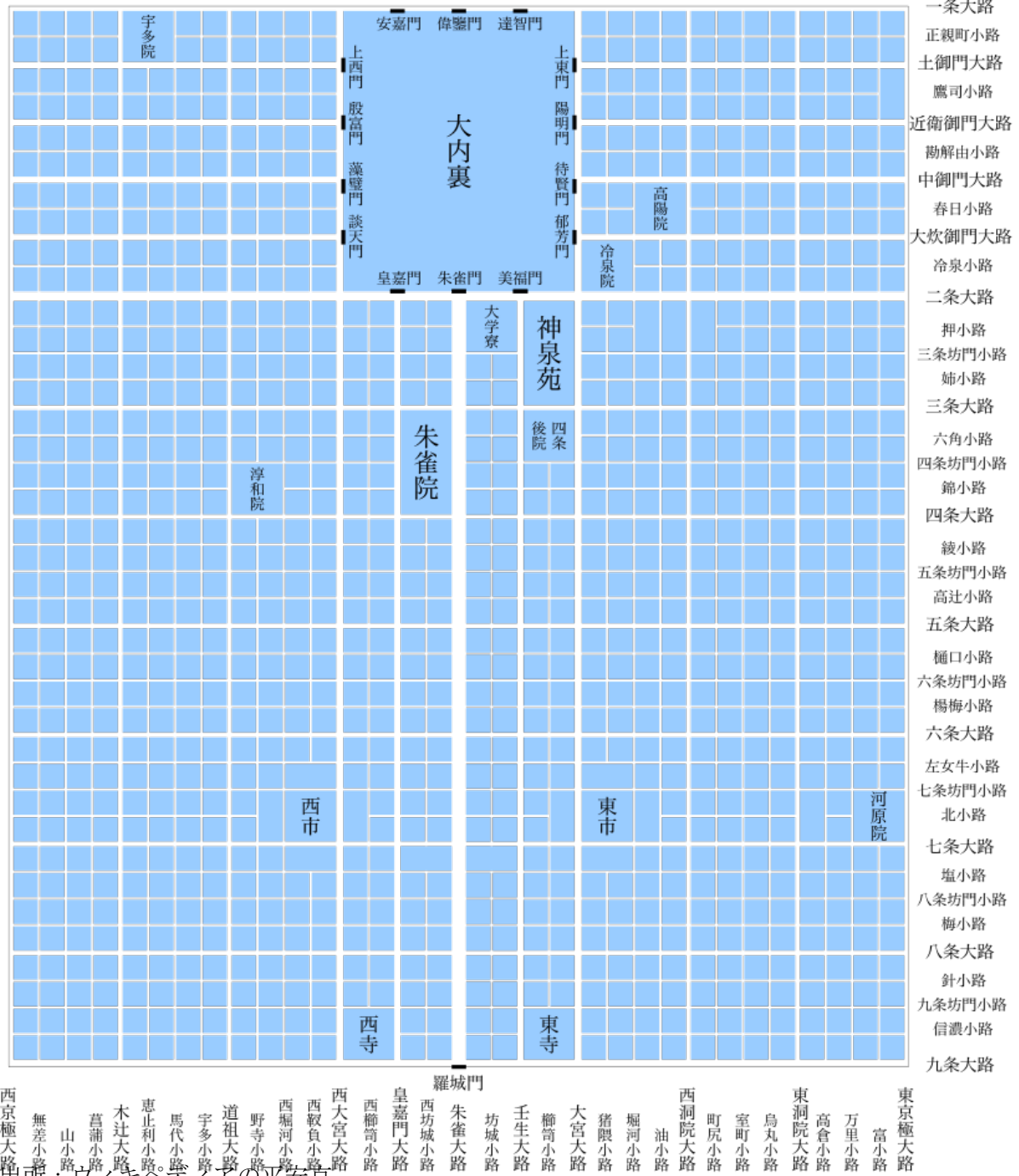
私たちの研究は、歴史問題に留まらず社会や経済、更には国際関係にも及んでおり、研究調査の過程で知識だけでなく、様々な教養も身につけることができた。

奈良、ここで別れ、いつも再会できるかはわからないが、離れたくない気持ちを抑えながら東京への帰途についた。

なら、さよなら。

<参考地図>

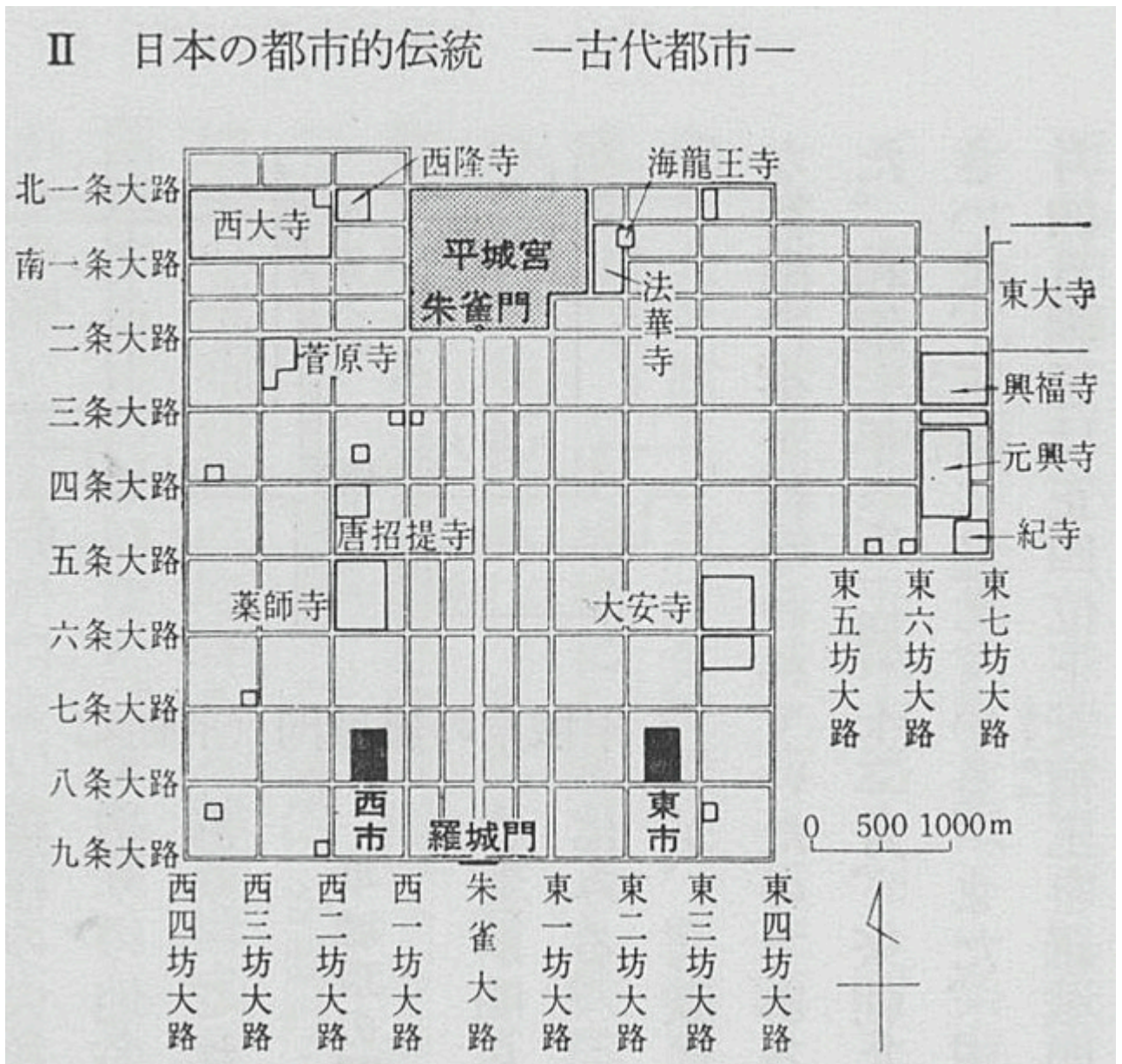
## 平安京全体図（仮）



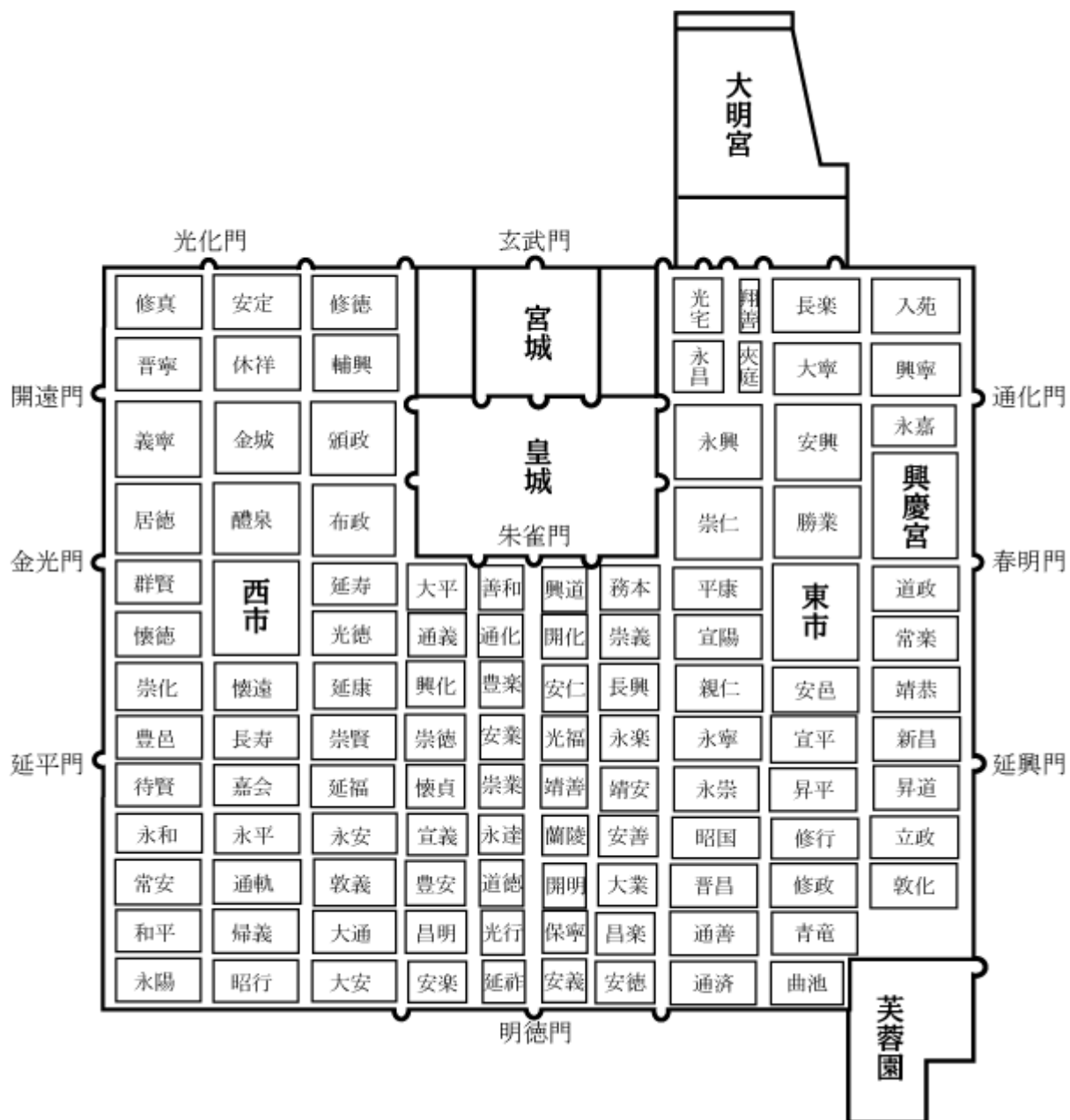
出所：ウィキペディアの平安京

注意：図に描かれているもの以外にも、複数の町にまたがる邸宅などにより小路が途切れていることがある。

平城京条坊図



出所：西川幸治著『都市の思想』から、元図は佐藤興治氏「平城京と平安京」より。



出所：『自作中国歴史地図集—唐長安城図』より添付

注意：図に描かれているもの以外にも、複数の町にまたがる邸宅などにより小路が途切れていることがある。

## 東アジアのなかの飛鳥寺

日時 2013年10月28日(月) 14:00～17:00

場所 帝塚山大学図書館2F(Cキューブ アラチイブライユニクススペース)

内容

14:00 開会(自己紹介など)

14:15～14:45 報告1 「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」  
(多摩大学)

14:50～15:20 報告2 「吉川真司『飛鳥の都』について」  
(帝塚山大学)

休憩

15:30～16:00 レクチャー1 「飛鳥寺について-歴史編」  
(帝塚山大学 鷲森浩幸-古代史)

16:00～16:30 レクチャー2 「飛鳥寺について-考古編」  
(帝塚山大学 清水昭博-考古学)

飛鳥寺の考古学的研究

帝塚山大学 清水 昭博

「蘇我馬子から仏舍利を送り法興寺の刹の礎中に置き、刹柱を建てる。時に種種の業・大格四河を設ける。出家を願うもの多い。馬子ら百済服を着る。」

この記録は『上宮太子拾遺記所引本元興寺縁起』の推古天皇元年(593)一月条に載せられた飛鳥寺の塔の心柱を立てる際の儀式的様子である。この儀式は蘇我氏を中心となり、馬子を始め従者ら百余人は頭を削形にし、百済服を着ていたという。ここにちなみ、蘇我馬子が百済服を着たと取って記す必要があったのだろうか。

飛鳥寺の発掘調査は昭和31・32年(1956・1957)にはじまり、塔、三棟の金堂、中門、回廊など伽藍中核部の状況が解明され、その後の系統的な調査によって寺域や講堂、真鍮神像の状況なども明らかになっている。また、塔や東金堂をはじめとした建築物の構造や基礎瓦を主体とした出土品からは、飛鳥寺に関わる造営技術の源流を垣間見ることが出来る。

崇峻天皇元年(588)の飛鳥寺の造営に際し、百済から僧侶が派遣され、仏舍利が搬せられ、寺工や鑿造師上、瓦博士、圃工など寺院造営に必要なさまざまな技術者が派遣されたことが『日本書紀』や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に記される。記録を業重に読めば、日本で最初の本格的な寺院である飛鳥寺の造営は百済の技術によっておこなわれたとみることが出来る。

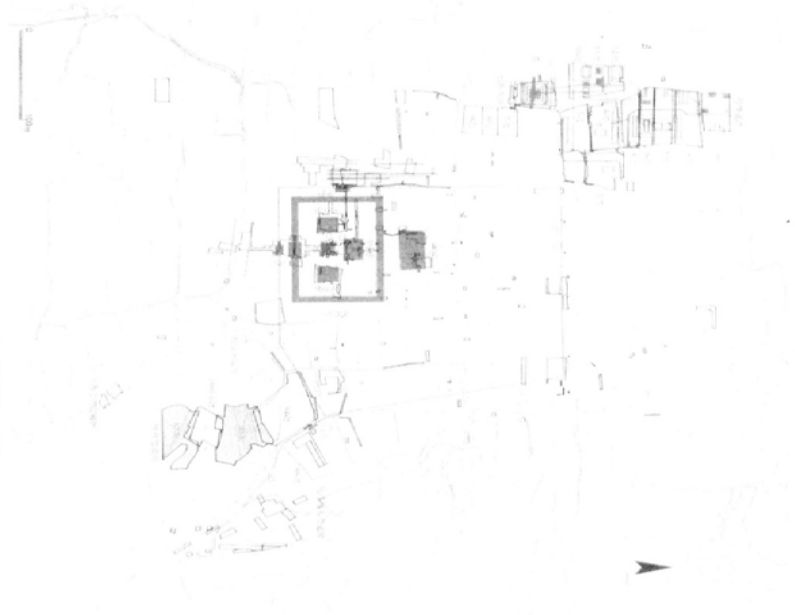
しかし、発掘調査によって発見された伽藍は後に飛鳥寺式と呼ばれる。当時、百済地域では確認されていなかった一塔三金堂式という特異な伽藍配置であった。伽藍配置という寺院の根幹に関わる要素が百済的なものではない。この点に関しては明確な解釈がないままに、この伽藍配置が高句麗の都、平壤にある津岩里庵寺や定陵寺跡に近いことから高句麗の影響が想定されてきた。

だが、近年の百済地域での寺院跡の調査研究によって、飛鳥寺式伽藍配置にも百済の影響がうかがえるようになってきた。その他の考古資料のあり方を含めて、飛鳥寺と百済との強い関係がより鮮明になってきたといえる。冒頭に記した百済服を着た蘇我馬子の姿も、そうした状況のなかでとらえたと理解しやすくなるのではないだろうか。

### 参考文献

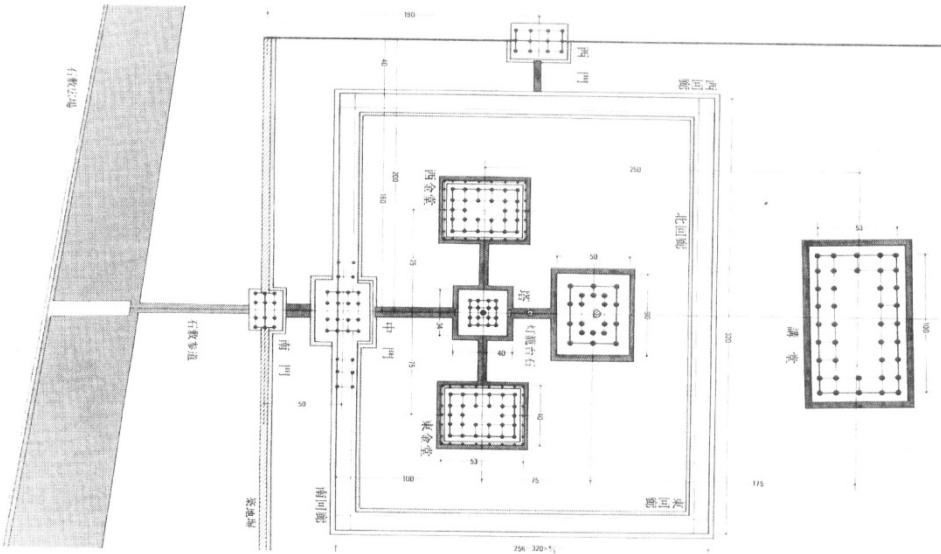
- 奈良国立文化財研究所編 1958 『飛鳥寺を再調査報告書』  
飛鳥資料館編 1986 『飛鳥寺』  
奈良国立文化財研究所編 1999 『奈良国立文化財研究所年報 1999—1』  
花谷 浩 2000 『飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦』『古代瓦研究1』 古代瓦研究会  
国立民族学文化財研究所編 2009 『王興寺址Ⅲ 木塔社金堂址発掘調査報告書』  
李炳燾 2012 『百濟寺院の展開過程と日本の初期寺院』『帝塚山大学考古学研究所研究報告XIV』 帝塚山大学考古学研究所  
李炳燾 2013 『百濟の寺院からみた飛鳥寺三金堂の源流』『奈良美術研究』第14号、早稲田大学奈良美術研究所  
飛鳥資料館編 2013 『飛鳥寺 2013』

図1 飛鳥寺の寺域 (奈良国立文化財研究所編 1999)



2

図2 飛鳥寺伽藍配置復原図 (飛鳥資料館編 1986)



3



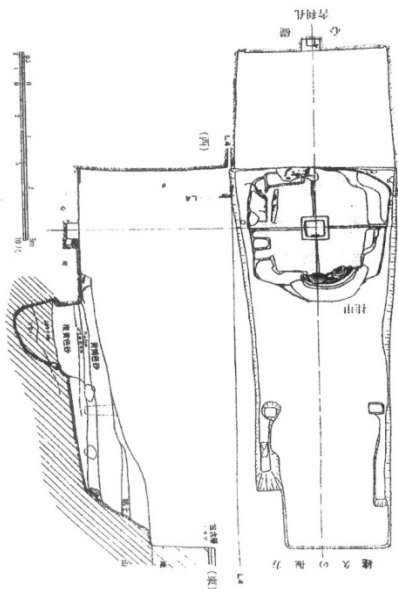


図3 飛鳥寺の塔心礎 (奈良国立文化財研究所編 1958)

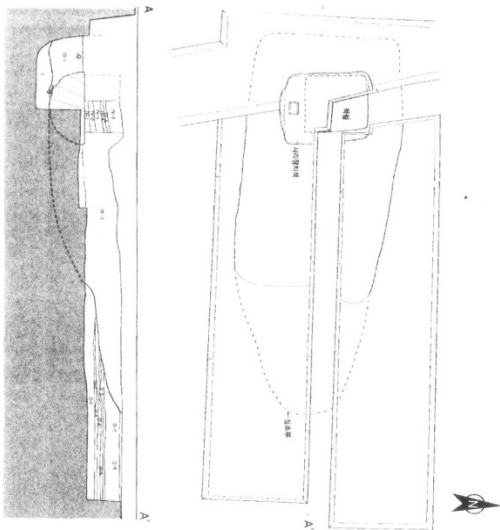


図4 百濟・王興寺跡の塔心礎 (国立扶餘文化財研究所編 2009)

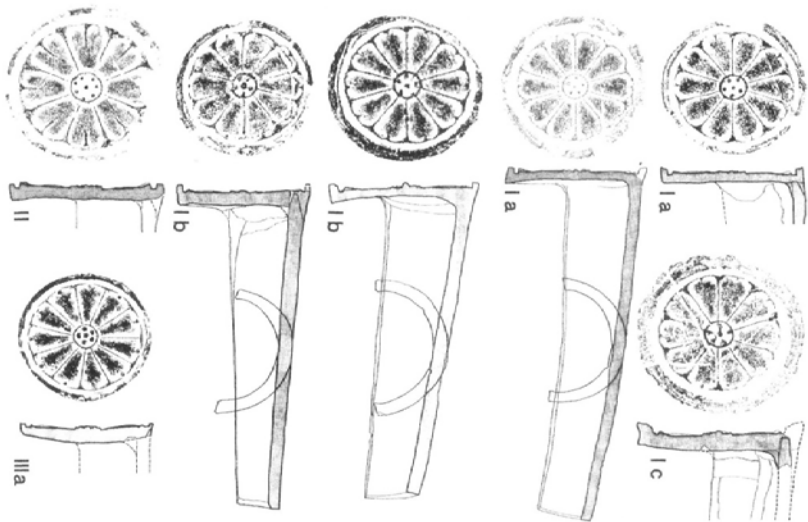


図5 飛鳥寺創建軒丸瓦 I (I~III型式) (図5~7はいづれも花谷 2000)

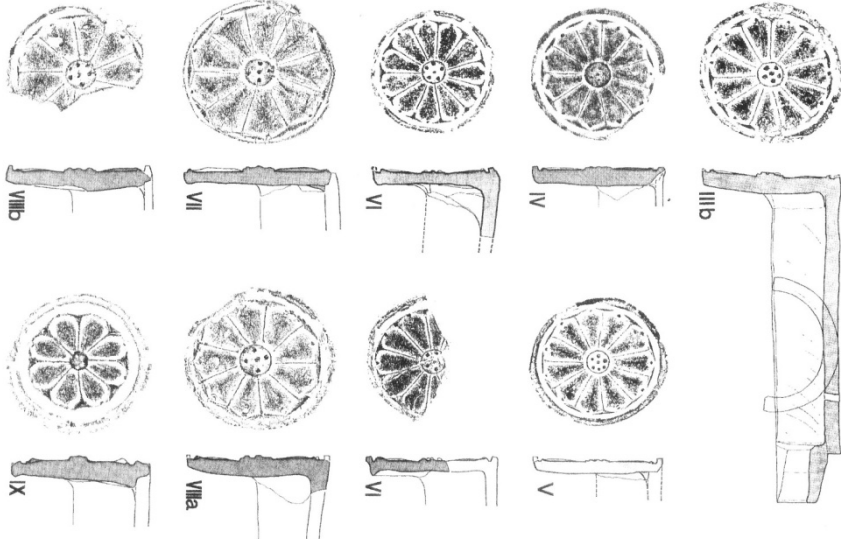


图6 飛鳥寺創建軒丸瓦2 (Ⅲ~Ⅸ型式)

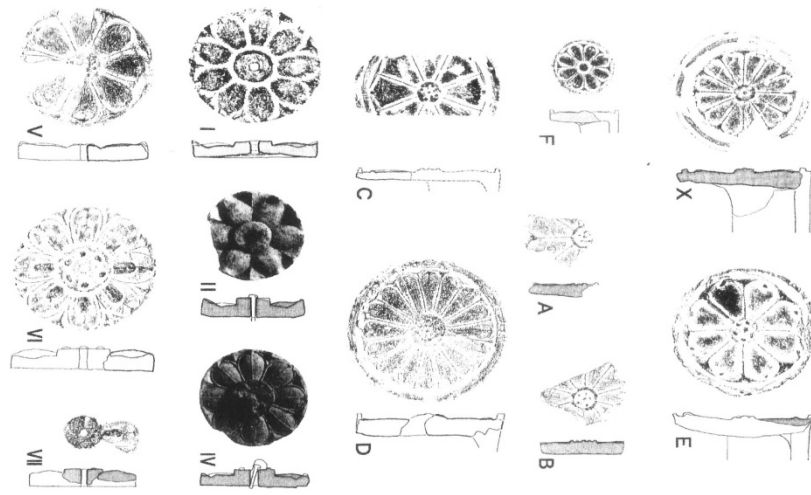


图7 飛鳥寺創建軒丸瓦3 (X型式・A~F)・垂木先瓦 (I・II、IV~Ⅷ型式)

# 飛鳥寺についてー歴史編

齋藤 浩 幸  
2013/10/28



図8 高句麗寺院の伽藍配置(左:平養清治里藤寺、右:平養定徳寺跡)(李炳燮 2013)



図9 百濟寺院の伽藍配置(左:扶余宅林寺跡、右:百濟の諸寺)(李炳燮 2012)



図10 扶余王漢寺跡と飛鳥寺の御健軒丸瓦(李炳燮 2013)

## I 物部守屋の滅亡と推古天皇の即位

1. 基本的に大王家の後継者争い(蘇我-物部の蘇我間の対立・仏教問題)

+その中でもやはり、大王家の後継者争い(これもとても重大な問題)

### 2. 用明後の後継者争い

(1) 572 敏明死去 敏達即位 594 敏達死去 用明即位

(2) 597 用明死去 用明が2年という短い期間で死去したため、後継者争い

+穴穗部皇子の即位が予定されていたと思われるが、それを忌避する動きが起きる

+穴穗部皇子が忌避された理由はよくわかっていない

(3) 以下の5人が有力な後継者として浮上して

1) 穴穗部皇子: 敏明の子 母は蘇我馬子の子小姉若(蘇我系)

2) 法興部皇子: 敏明の子 母は蘇我馬子の子小姉若(蘇我系)

3) 押坂真人皇子: 敏達の子 母は広姫(息長代系 あるいは王孫系)

4) 竹田皇子: 敏達の子 母は額田部皇女(推古)

+額田部は敏明と蘇我馬子の子聖徳太子であり、これも蘇我系といえる

5) 麿戸皇子: 用明の子 母穴穗部真人皇女

+間人も敏明と小姉若の間の子 蘇我系

(4) 物部守屋は穴穗部皇子と連絡 その理由は不明、血縁的にはやや不自然

(5) 蘇我馬子は泊瀬部・竹田・麿戸と連絡 いずれも血縁的に蘇我系

1) ただし、これらの集団の背後には額田部皇女の存在を想定すべき

2) 崇峻即位前記: 蘇我馬子は次皇相尊(額田部皇女)を奉じて蘇我らに招いて、軍事活動を開始

### 3. 物部守屋の滅亡の経緯

(1) 用明死去の直前、守屋は自らの阿都別業(現八尾市藤部付近)にむしり、武装

(2) これに対して、馬子は穴穗部・宅部皇子を攻撃し、内紛が地まる

+ここで注目すべきはまず、第一に穴穗部等を攻撃している点

+単なる蘇我間の内紛ではなく、中に王家の人物がいたことを示す

(3) 馬子らと守屋が淡川(阿都と同じ)で戦闘 その結果、守屋は滅亡する

### 4. 崇峻暗殺事件(592)と推古天皇

(1) 『日本書紀』によると、馬子の命によるという 詳細は不明

(2) その後、額田部皇女が即位(推古)

1) 推古は麿戸皇子を補佐役として重視

(3) 用明死去をきっかけにする大規模な政治的な動揺はこの隙隙で初めて収束

(4)仏教導入派が全面的に勝利し、これ以後、政策的に仏教の導入が図られる

## II 寺院の建立

### 1.最初の寺院

(1)飛鳥寺が最初の本格的な寺院と評面されるが、それはなほ正しいといえない

(2)いつかの寺院がそれはと問われるが、創建される

2)小治田寺・起漸は明確ではないが、この段階で創建された寺院の可能性

3)法隆寺・聖徳太子の創建 斑鳩宮に隣接して存在

2.寺院と宮・邸宅

(1)この段階の寺院は宮・邸宅と密接な関連をもっており存在

1)飛鳥寺：時代はやや下がるが、蘇我氏の邸宅は飛鳥寺に近い甘藷園 甘藷丘泉屋遺跡

2)小治田寺：推古の小治田宮に隣接する寺院であると思われる

+富丘東方遺跡で平安時代の小治田宮を埋没、おそれ、これが小治田宮

3)法隆寺：藤原皇子の斑鳩宮と隣接

(2)寺院の創建の特徴として、発願者の邸宅に隣接する形で建立されること

(3)重要なのは飛鳥寺は本格的に、最初期の寺院の内でのこと

+王宮もほぼ同じ時期に寺院の創建を行っていること

(4)蘇我氏のみが仏教導入に積極的わけではない。主体は推古などや蘇我氏

## III 飛鳥寺の造営

### 1.発願の状況

(1)『日本書紀』用明天皇7月条 蘇我馬子が物部守屋との戦いの中で発願する 戦勝を祈願

+凡諸天王・大神王助斯於我使獲利益 願当奉為諸天太子大神王 起立寺塔 流通三室』

### 2.造営過程

(1)『日本書紀』に簡潔であるが、さまざまな記載があり、これは信頼できるとされている

(2)造営過程を簡単に記す 主に『日本書紀』による

1)崇峻(688)年：百濟から技術者が派遣され、造営が始まる

2)崇峻(689)年：山に入って、材を取る。

3)崇峻(692)年：仏堂と歩廊の造営を始める二本格的な造営の開始

4)推古(693)年：仏舍利を納め、塔を立つ。

5)推古(696)年：『日本書紀』による、造営を終える

+しかし、これは露臺殿の塔の完成を指し記述され、全体の完成ではない

6)推古(705)年：14年、『日本書紀』によると、大六仏の製作とその完成

+ただし、大六仏は聖徳太子による、17年

+これで、基本的に主要な部分は完成したか

飛鳥寺研究部

## 吉川真司『飛鳥の都』1章 飛鳥寺の創建

眞 森 浩 著  
2013/7/22

### 1. 概要

1.最初の飛鳥寺院

(1)欽明(365)年 仏教公伝 蘇我稲目の礼拝 禪庄

(2)敏達(468)年 仏教の彈圧

(3)用明天(587)年 用明の死去

1) 度摩尊やいとも建勅しながら成功

2) 蘇我馬子は法隆寺皇子を擁立するとともに飛鳥寺の創建に着手

(4)百濟王は馬子の要請を受けて仏舍利・技術者を倭国に送らす

1) 寺工：二賢博士・互博士・画工

2) 元興寺縁起の塔置盤銘によると、東漢氏が建設にあたり、金工は忍海・朝妻・鞍部・山西の各氏

(5)崇峻(690)年 用材の切り出し

(6)5年 仏堂・四輪 崇峻暗殺・推古即位

(7)推古(693)年 塔の建設

(8)4年 堂塔のすべてが完工

(9)13年 銅製・銅製の文六仏像を造り始めた 聖年完成

2) 元興寺縁起の大六光緒によると、己巳年=699年

2.飛鳥寺発願

(1)中金堂は今の飛鳥寺本堂の位置 飛鳥大仏は削いでいない

(2)伽藍は1塔3金堂の主つた(御所のない)配置

(3)地下式心礎 王興寺-回廊の東西に付属建物

1) 王興寺でも地下式心礎 舍利容器と荘嚴具

3.飛鳥寺の役割

(1)大化改新以前の飛鳥寺は氏寺とみなのが妥当

2) 天武(680)年 援助策の打ち切り 天皇の屋宮は国大寺に限定 飛鳥寺は特に関係ない

(2)三堂興隆記：蘇我氏の仏教信仰の公式に承認し、それを支援する意志を示した

+王権が仏教宣布に乗り出したと読むのは過剰解釈

1) 推古(702)年には寺46か所・僧816人・尼569人

2) 寺院は祖先祭祀だけでなく、王権を中心とする政治秩序とも関わる

4.花組と星組

(1)素丹蓮華文の軒丸瓦

1) 星組：越前地方で製作 中門や回廊

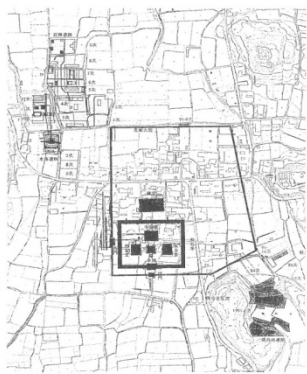
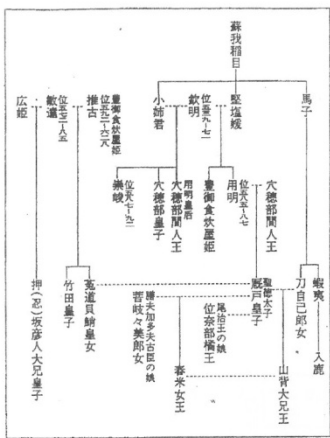
2) 花組：飛鳥寺近傍の瓦葺 中金堂など伽藍中程部

- (2)飛鳥寺の痕、皇朝・花組は別の仕事場に移った
- 1)皇朝：豊浦寺・現瑞寺・四天王寺
  - 2)花組：豊浦寺・東山原寺・懸寺など
  - \*すべて蘇我氏の上宮王家に属する寺院
  - \*やがて瓦葺は遠隔地にも設けられる 文様系統も複雑化
  - (3)瓦工に見られた動向はキエ・金工・画工でも同様
- 1)後者は畿内各地に派遣され、寺院の成立をたらしめた
- 2)飛鳥寺は「文明化の総合センター」

三 コメン

1.蘇我氏と仏教信仰

- (1)渡来は東漢氏などの渡来人との関連を重視
- \*東漢氏：581年に渡来した漢人からなる氏族 大和居住・東漢氏 河内居住・西漢氏
- 2.元興寺縁起
- (1)記載上は天平10(727)年の成立 585年に創建がある
  - (2)吉川は蘇我氏による「文明化」策の一環ととらえる
  - (3)塔婆整理：大穴光をかり用ひた(7)9、この部分は信頼できるとされる
- 3.用明後の争い
- (1)用明の死後、天皇家内部で後継者争いが起さる
  - 1)穴穂部皇子-物部守屋と連携
  - 2)額田部皇女の弟の母蘇我馬子は泊瀬部・藤戸・竹田皇子と連携
  - 3)威力衝突が起こり、穴穂部・守屋は滅亡 泊瀬部皇子が即位(崇峻天皇)
  - 4)仏教拒否の中心人物であった物部守屋は消滅
- 4.三堂興築期：仏教宣布に乗り出したとするのは過剰解釈か
- (1)推古32(624)年には寺46が所までい、この数値はほぼ信頼できるか



あらたに判明した飛鳥寺の寺域 (宗文研 1999)

蘇我氏と仏教信仰

蘇我氏と仏教信仰

(1)渡来は東漢氏などの渡来人との関連を重視

- \*東漢氏：581年に渡来した漢人からなる氏族 大和居住・東漢氏 河内居住・西漢氏

2.元興寺縁起

- (1)記載上は天平10(727)年の成立 585年に創建がある
- (2)吉川は蘇我氏による「文明化」策の一環ととらえる
- (3)塔婆整理：大穴光をかり用ひた(7)9、この部分は信頼できるとされる

3.用明後の争い

- (1)用明の死後、天皇家内部で後継者争いが起さる
- 1)穴穂部皇子-物部守屋と連携
- 2)額田部皇女の弟の母蘇我馬子は泊瀬部・藤戸・竹田皇子と連携
- 3)威力衝突が起こり、穴穂部・守屋は滅亡 泊瀬部皇子が即位(崇峻天皇)
- 4)仏教拒否の中心人物であった物部守屋は消滅

4.三堂興築期：仏教宣布に乗り出したとするのは過剰解釈か

(1)推古32(624)年には寺46が所までい、この数値はほぼ信頼できるか

## 吉川真司『飛鳥の都』1章3小墾田宮の王権

宮村 廣大  
2013/10/7

飛鳥寺研究部

2013年7月29日  
H13801 上野真奈

### 吉川真司『飛鳥の都』

#### 第1章 飛鳥の王法と仏法 2アジヤの中の推古朝

《新しいアジヤ情勢》

中国の動向：4世紀以降、南北対立が続いてきた。

長江流域で漢族の王朝、華北で遊牧民の王朝が興起。

→華北は北朝によって統一

→534年に東西分裂、東魏は北齊、西魏は北周に取って代わられた。北朝は北齊を吸収

→581年隋中クワンターが起き、有力軍閥の楊堅が新王朝を立てた。(隋の文帝)

文帝：開皇律令を制定。中央・地方の行政組織を徹底的に改革

589年：南朝の陳を滅ぼして中国統一を成し遂げた。

604年：文帝死去。皇太子・楊広が即位。二代皇帝となる煬帝。

突厥と高句麗の存在

突厥：トルコ系の遊牧民、もともとアルタイ山脈の西南にいた勢力。

552年、強勢を持った柔然を打倒。

→20年足らずの間には中央アジヤから北東アジヤに至る草原・砂漠地帯を支配下に収めた。

西方：ササン朝ペルシアと結んでエフタルを滅ぼし、東西交易の富を独占した。

東方：北齊・北周に圧力をかけ、莫大の財物を献上させた。

6世紀後半の突厥はアジヤ最大・最盛の国家であったが、

隋が華北を統一すると情勢が変わった。

538年：文帝は突厥を東西分裂させ、東突厥を臣従せしめた。

607年：煬帝は大軍を率いて長城地帯を巡幸し、突厥の君主・啓良可汗を威圧した。

高句麗：6世紀の朝鮮半島では東南部を本拠とする新羅が急速に台頭してきた。

北：高句麗と争って東海岸沿いに國脈を広げ、551年西海岸の遼江流域に進出。

南：百濟の勢力と対峙し、532年金官、562年大加爾を滅ぼして加耶全境を領有した。

新羅は国を休明を尊々と整え、中国王朝とも最後的外交関係を結んで、さら

なる発展への基礎を築いていた。

高句麗は552年、平壤に新都・長安城を築いて新羅に對抗。570年には新羅

の背後勢力である倭に使者を送った。やがて隋が出現すると、遼河をはさん

で国士を接する高句麗には大きな脅威となった。

598年、隋軍に攻められたが、高句麗はこれを退却、しばらく緊張状態が続く。

《推古朝の政權構成》

隋を中心とする国際秩序の形成をうけ、百濟・高句麗の戦乱とも連携しながら、倭は新し

い海外関係を築いていくことになった。

#### 1. 概要

(1) 推古 11年 新羅征伐中止、僧制整備を始める

(2) 同年 10月 王宮を熊淵宮から小墾田宮に移す

→飛鳥地方の小墾田に「保札」にふさわしい王宮を建てようとした

(3) 同年 12月 冠位十二階制定

→文臣者階の序列つけようとしたシステム

(4) 推古 12年この年初めて冠位十一階が用いられた

→

(5) 推古 12年 十七か条憲法を作る

→正しい政治をするように諸業事に求めた

(6) 推古 16年 小墾田宮で外交儀礼を受けた

→アジヤの諸国に迫っていくと国内の風俗習慣を感えるという意図があった

(7) 推古 28年 聖徳太子は蘇我馬子とともに「天皇記および国記、臣、連、作部、国

造、百六十部（姓797戸）あわせて公民（材37カ）らの本記を撰じた

→まだ中央集権的な政治体制が整ってない状況だったため君主制、官僚制としては

初歩的ではあったが政治体制を整えるという意図でそれぞれの本記を書いた

#### 2. まとめ

・遣隋使を派遣したのは隋の文化（政治制度、建造物、保札）を積極的に取り入れたため

・隋の進んだ文化を取り入れたのは政治的欺詐で倭国を文明化させようとしたため

(遣隋使の始まり)

開皇 20(600)年：倭王が使者を派遣。(『隋書』倭国伝)

王の姓・アム、名・タリシヒコ、号・オホキミ



『日本書紀』には全く記述なし、これが倭国最初の遣隋使。

倭王に関する記事の問題点

「アムタリシヒコ」は男性の称号、女性天皇推古の時代にふさわしくない。

異例であった女性天皇の存在を隠蔽し、伝統的な男性天皇の形式をとって外交にあたった可能性がある。

第二次遣隋使

大業 8(607)年

倭国が朝貢。推古 18(607)年 7月条によると、この時の遣隋使は小野妹子。隋の皇帝は 2代皇帝の楊帝

この時の目的は新興大国・隋から仏教と礼儀を学ぶこと。

推古 22(614)年：大上御田原が派遣され、翌年、百濟使とともに帰国。



『隋書』倭国伝はこの件について全く沈黙。

『隋書』高帝紀には、『隋書』倭国伝にも『日本書紀』にも見えない大業 4(608)年、6(610)年の遣使が記載されている。

遣隋使は何回遣わされたのか→4回説、6回説がある。

2013/09/27

N12015 倉谷 なつみ

吉川真司 『飛鳥の都』

第1章 飛鳥の王法と仏法 4 二つの王家

(上宮王家と野嶋)

上宮王家…聖德太子の一統、藤原中心に全国を地に広げをもち、木田郡宮や出雲を行った。

野嶋…飛鳥の北北西15キロほどのところにある。法興寺で成仏し、

矢田庄と大和川に南北を囲まれている。

推古 9(600)年 聖德太子が野嶋に宮宮を造り始める

4年半後 太子が野嶋宮に移り住む

→聖德太子とヤサキや子良たち、王家に仕える兵衛も目を構え、勢力拠点として発展

→交通の要衝としての野嶋

→飛鳥…野嶋を結ぶ川筋は必ず通る →政治的にも経済的にも重要

→小野田→野嶋をまっすぐ結ぶ道路 →王宮から遠かったため改善

→太子道 →下つ道、横大路とは別に敷設された斜向道路→北で20度ほど西にぶれる

→太子道と遺構

→野嶋宮：1939(昭和14)年 跡地を中心とする法興寺東院に地下で検出

宮全体は聖德太子を東照殿とする約212メートル四方の規模と推定される

→野嶋寺：法興寺の前身となった野嶋無量、野嶋宮の西隣に存在

『皇朝』神皇正統の年代から610年前後の創建と考えられる

→法興寺：野嶋東側に位置。

→野嶋道：法興寺の南約500mを東西に走り、太子道と直列に交わっている

野嶋地区…東 野嶋本宮、西 野嶋寺、南 野嶋道

→太子道を基準とする全体プランのもとに開発

中宮寺、法興寺などの寺院や上宮王家や藤原氏の宮舎が存在していたと推測される

(聖德太子の死)

聖德太子…厩戸王、推古朝における皇位継承者、蘇我氏の血を受け継ぐ。

推古 15(607)年 壬午部が与えられ、「上宮乳部」と呼ばれる

→王家の政治力・経済力の源泉となる

推古 29(621)年 2月5日 野嶋宮で崩去

→推古天皇と蘇我馬子が衝突をうける

推古天皇…中継ぎ天皇として即位、当時はまだ蘇我の慣習がなく、推古天皇が死後を保っている間に蘇我も行った聖德太子が死去した

上宮大皇子…聖德太子と蘇我刀自古間女の子

上宮王家を受け継ぎ、「一統」の結束をはかる役割を担う

～道品と太子信仰～

太子の苦行を市うため、親しい人々は仏教による追善供養を行った

- ・法興寺金堂 釈迦三尊像
- ・飛鳥彫刻の代表作とされる金輪像、様式、技法などからも飛鳥時代に相違なし、蓋書には道像の由緒と所願が刻まれている。
- (先帝銘文について)

法興寺1(621)年12月 皇前大臣(個人皇妃)が亡くなる  
 32(622)年正月 上宮法王(聖德太子)と千食王后(蘇我夫人)が病気になる  
 →王后・王子、諸臣は仏像造像を造願、平癒祈願  
 同年2月21日 王后=千食王后(蘇我夫人)が亡くなる  
 22日 法王=上宮法王(聖德太子)亡くなる  
 33(633)年 仏教完成 →三生(父王、王后、法皇)の浄土往生、自分たちの現世安穏を祈願

ポイント

- ・聖德太子の没した年月日が『日本書紀』と大きく異なる
  - ・三生の相次ぐ死という異常事態を伝える
  - ・私年号を用いている
  - ・聖德太子を上宮法皇と称している
- ↓  
 聖德太子の立崩と業績がよく表現されている

・天智天皇

偉い人物に例えて作った聖德太子。鎌倉時代の後ととに、現在では断片となつてほんの一部が残っている。

編纂の原則には原文が組み込まれ、その本文が『上宮聖德法王帝説』に引用されている。  
 『上宮聖德法王帝説』による)

飛鳥三尊像光背銘文同様→事実を伝えている可能性大  
 621年12月 間人母王、翌623年2月22日 太子 死去  
 太子の弟の多忍法皇大御女は悲嘆にくれ、太子が天降國に往生したさまを見たいと推古天皇に申したところ、天皇は采女たちに命じて編纂二集を作らせた

ポイント

- ・「天皇」の文字
- 太子の没後すぐの作品であれば天皇号推古御成の後の有力な証拠
- ・太子の異称伝承の同像化
- 僧侶が参列する法会場面…聖德太子の彫刻群講説
- 従者を連れられた騎馬行の場面…片岡山遊幸が描いたもの

太子信仰…太子の死後しばらく経ってから高まった、太子を聖者として仰ぐ信仰。  
 伝承を多く含んでいる。また『日本書紀』の叙述もこの影響を受けている

(伊坂王家)

伊坂王家…上宮王家にならば有力貴族で、聖德太子の死後急速に注目を集める。  
 非藤原系王族の主軸をなしていた  
 6世紀初頭 応神天皇の5世孫とされる、継体天皇が新しい王族の始祖となる

父	母	子	備考
継体天皇	手白香皇女	欽明天皇	
	阿曇媛	用明天皇、推古天皇	祖父：蘇我稻目
欽明天皇	小碓君	崇峻天皇	
	石姫	敏達天皇	母は宣化天皇の皇女
敏達天皇	額田部皇女(推古)	竹田皇子	どちらとも即配せず
	広徳	彦人大兄王	母は息長真人王の女
彦人大兄王	糠手姫皇女	田村皇子 = 舒明天皇	

敏達→彦人大兄→舒明…藤原氏との関係を全く持たない王家・土統

～非藤原系王族の根拠地～

伊坂彦人大兄皇子…地上の伊坂宮(現：奈良県桜井市伊坂村)に住んでいたため、このように呼ばれる

伊坂宮…巨たな部臣集団が専任  
 『日本書紀』…刑罰、かつて息長中継(奈良天皇皇弟)のために設置、敏女(敏女)の死後、伊坂宮とともに王家領として受け継がれる。1世紀後彦人大兄のものとなる

↓  
 当時の戸数1万5000戸以上(総国の支配人口の1割近く)

～彦人大兄の死去～

推古朝初年(598年)死去、墓は大和国高市郡の広瀬に築かれる。  
 『延喜式』では「坂田郡」と呼ばれている。東西15町、南北20町→現代最大  
 →奈良県広陵町の牧野古墳をあてる説が有力  
 推定長さ9mの円墳、横穴式石室

～なほ広瀬に葬られたか～

- ・彼の父である敏達天皇の額もかりが行われた
- ・彦人の別宮「本家宮」があった
- 広瀬…伊坂王家のもう一つの拠点



（舒明天皇の即位）

聖德太子が亡くなった後も、推古天皇は皇位継承予定者を指名しなかった。

推古34(696)年 蘇我馬子死去 → 蝦夷があとを継ぐ

36(698)年 推古天皇死去

→推古天皇—聖徳太子—蘇我馬子—中継とした推古朝政體の終了

～推古の遺詔～

上宮王家の山背大兄王と押坂王家の田村皇子を小墾田宮に葬り常せる

（おそらく）田村皇子からこの遺詔を聞いた蘇我蝦夷は大失態たろといずれを天皇に立てるか賭った

推古の遺詔…田村皇子

→山背大兄王 反撃、筑前守理勢が強く推す

→蝦夷率兵、筑前守理勢を殺害、山背大兄王一派は口をつぐむ

～舒明天皇の即位～

629年正月 田村皇子が舒明天皇として即位 → 非蘇我系王族

皇后は非蘇我系王族の宅皇女

舒明2(630)年10月 岡本宮に遷居

岡本宮…飛鳥核心部にあたる地に初めて営まれた王宮。蘇我馬子の野志があった處と

飛鳥寺のほぼ中申地点に立地

舒明3(630)年 飛鳥岡本宮焼亡→田中宮に移る

舒明11(639)年 詔を發布

→百濟川のほとりに新しい王宮と大寺の造営に着手

『日本書紀』によると…「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」とある

同年 百濟大寺の九層塔が建つ→初めての天孫家の勸修寺

舒明12(640)年冬 百濟宮に遷居

→上宮王家の埴坂宮—延明寺を模したものの

～百濟大寺～

吉備祖師寺が該当。奈良県桜井市吉備の造山寺聖をしたため池から基礎が発掘された。

飛鳥寺をはるかに凌ぐ巨大寺院であったと推定される。



図13 斑鳩地域の遺存地割（ベースマップ「大田原遺集原図」に追加）  
 A 斑鳩宮跡地、B 百濟宮跡地、C 中宮今所、D 法興寺、  
 E 上宮遺跡（斑鳩宮跡地）、F 稲葉車庫（斑鳩宮跡地）、  
 G 斑鳩寺跡地（斑鳩宮跡地）の復元、H 斑鳩寺跡地に遺存する斑鳩宮跡地。

吉川真司『飛鳥の都』  
第一章 飛鳥の王法と仏法 5.隋から唐へ

<隋・高句麗戦争>

舒明天皇は犬上御田秋・葉師直日らを「大唐川」派遣

→史上初の遣唐使

→御田秋は推古22(614)年の遣唐使

それから16年の間に隋から唐への王朝交替が起きた

一隋の時代一

煬帝治世前半期

・隋の国力は最も充実

・洛陽・長安から南は江南、北は涿郡まで開削された大運河

→経済的・軍事的に大きな役割を担う

・度重なる土木工事で民衆は深く疲弊

→貴族・豪族の反感も高まる

→その中で、煬帝は高句麗との戦争に突入した

・文帝の跡を注ぎ、突厥と高句麗の連携を断つため、どうしても必要な戦争であった

→三次にわたる出兵に共謀しながら、大規模な反乱が中国全土を覆う

→それが隋の致命傷となった

《高句麗親征》

・612年 第一次高句麗親征実行

・110万余の軍勢を動かし、国境を越える

・高句麗の抵抗は激しく、煬帝は東部洛陽に退かざるしかなかった

・613年 第二次高句麗親征

・遼東域下まで兵を進めるが、補給基地を守る機玄感が反乱を起す

→またも撤収することになる

→この前後から各地で反乱が頻発するが、煬帝は諦めない

・614年 第三次高句麗親征

・高句麗の形式的降伏を得ただけで終了

この間に内乱がますます激しくなり、鎮江軍は全く力を失った

→全国に群雄が割拠し、これに北方の突厥が介入する情勢となった

→煬帝は江南に難を避けた

618年3月 揚州江都でついに殺害される 50年の生涯を終える

《他国》

倭王朝もある程度、情報を得ていた

・煬帝の死から半年が経った推古26(618)年8月、高句麗の使者がやってくる

→煬帝が30万の軍兵で攻めてきたが、これを撃破したと述べる

### Appendix 3. 多摩大学と帝塚山大学との合同ゼミ及び飛鳥寺視察について

今回の合同ゼミの詳細については、多摩大学と帝塚山大学のホームページにそれぞれ掲載されたものを以下紹介する。

#### 【多摩大学 HP より】

([http://www.tama.ac.jp/topics/news/2013/11/22/131122\\_interseminar\\_asia.pdf](http://www.tama.ac.jp/topics/news/2013/11/22/131122_interseminar_asia.pdf))

2013年10月28日から29日にかけて、本学インターゼミ・アジアダイナミズム班は、帝塚山大学と合同ゼミを実施したほか、飛鳥寺にてフィールドワークも行ったので、以下概要を報告する。

#### 1. 合同ゼミについて

2013年10月28日、帝塚山大学にて多摩大学のインターゼミ・アジアダイナミズム班(経営情報学部の金美德教授・巴特尔准教授と学生6名)は、帝塚山大学(人文学部日本文化学科の鷺森浩幸教授・清水昭博准教授と学生4名)と合同ゼミ「東アジアのなかの飛鳥寺」を開催した。

下記合同ゼミのタイムテーブルに示した通り、両学の教員による合同ゼミの趣旨説明、参加学生による自己紹介を行った後、多摩大学からは「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」と題し、本年春からの研究成果を報告した。帝塚山大学からは「吉川真司『飛鳥の都』について」と題し、鷺森浩幸教授を中心に、自主的な学習会の形で、吉川真司著『飛鳥の都』の最初の部分を読み進めてきた成果報告が行われた。

最後に、鷺森浩幸教授には歴史学の立場から、清水昭博准教授には考古学の立場から「飛鳥寺について」と題し、飛鳥寺に関わる問題を論じて頂いた。

今回の合同ゼミは、両大学の初の試みでもあり、限られた時間のなかで行われたものであったが、参加者全員が積極的な議論を交わし、新たな知見や知識を得ることができた。今後は、引き続きより幅広い分野で同様の合同ゼミを実施して行きたい。

#### 多摩大学・帝塚山大学合同ゼミタイムテーブル

14:00	開会 (参加者の自己紹介、両学教員による合同ゼミの趣旨説明)
14:15~14:45	報告1:「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」 報告者:多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班メンバー (多部田裕也・経営情報学部3年、市村江梨果・経営情報学部3年、勝山義弘・経営情報学部2年、杉山友哉・経営情報学部2年、王星星・天津财经大学交換留学生、宮崎真・多摩大学 OB 現上智大学大学院修)

	士課程 2 年)
14 : 50～15 : 20	報告 2 : 「吉河真司『飛鳥の都』について」 報告者 : 帝塚山大学学生 (三好直樹・大学院修士課程 2 年 上野真奈・大学院修士課程 1 年、西連寺匠・人文学部 3 年、魚谷なつみ・人文学部 2 年)
15 : 30～16 : 00	レクチャー 1 : 「飛鳥寺について一歴史編」 報告者 : 鷲森浩幸教授 (帝塚山大学人文学部日本文化学科、ご専門は古代史)
16 : 00～16 : 30	レクチャー 2 : 「飛鳥寺について一考古編」 報告者 : 清水昭博准教授 (帝塚山大学人文学部日本文化学科、ご専門は考古学)
16 : 30～17 : 00	閉会 (総括)

鷲森浩幸教授のレクチャー



清水昭博准教授のレクチャー



帝塚山大学の皆さん

本学インターゼミ・アジア班の皆さん



合同ゼミ参加者

2. 飛鳥寺視察について



2013年10月29日、本学のインターゼミ・アジアダイナミズム班は、フィールドワーク調査の一環として、飛鳥寺を始め、飛鳥資料館、元興寺、奈良国立博物館正倉院展、東大寺など歴史、文化施設を見学した。アジアダイナミズム班は、本年春より「日本とユーラシアの交流—飛鳥寺を手掛かりに—」を研究テーマとして掲げ、文献調査を中心に組み組んできたが、今回の帝塚山大学との合同ゼミに加え、飛鳥村まで足を運んで実地調査（現存する歴史的遺跡、資料など）を行った結果、主に次のような成果を得ることができた。

- ①本年春より組み組んできた研究の内容と方向性が間違っていないことを確認できたこと、
- ②今回得た新たな知見や知識は研究論文の完成に大きな弾みになったことである。

飛鳥大仏



飛鳥寺略縁起



飛鳥寺の石碑



元興寺



元興寺にて

東大寺石碑



3 .  
3  
・ 参  
加

者の感想

以下は、今回の合同ゼミと飛鳥寺視察に参加した本学学生による感想文である。

① 杉山友哉（多摩大学経営情報学部 2 年）

今回のフィールドワーク（帝塚山大学との合同ゼミ、飛鳥寺・博物館等の見学）は、今まで点と点であった知識が線で結ばれた。また、今までとは異なった視点の歴史観を知ることによって、思考の幅を増やすことができただろう。新しい気づき、発見、知識の確認ができたので、フィールドワークは成功したと思う。今後、内容を深掘りしなければならないところや、新しく調べなければならないことも分かってきた。研究論文の完成までの時間は残り少ないが、今回学んだことや疑問点、発見を論文に反映させて行きたい。

② 多部田裕也（多摩大学経営情報学部 3 年）

初日の合同ゼミは、大変有意義な情報交換ができた。特に飛鳥寺の歴史については、我々が調査し形作ってきた認識をひっくり返されるような情報も提示された。今まで進めてきた論文の内容を修正、もしくは書き足さなくてはいけないということに気付かされた。一方、2日目の飛鳥寺でのフィールド調査では、実際現地を訪れたことによって日本はユーラシアから多くのことを学んだということを改めて感じさせられた。東アジアもつと言えばユーラシア大陸に目を凝らせば、日本がいかにユーラシアの風の影響を受けてきたかが分かる。ユーラシア大陸で興った文化や情報は、シルクロードを通して大陸中に広がる。その情報が行き着く最後の場所、ユーラシアの掃き溜めが日本である。現在の日本人の中には、ユーラシアの掃き溜めとしてユーラシアの多様な文化が混交した血が流れている。この日本には誰一人として「俺は純粋な日本人だ」と言える存在はいないのであろう。このことを胸に留めて謙虚に生きていきたいと思う。

③ 市村江梨果（多摩大学経営情報学部 3 年）

今回、飛鳥寺に行ってみて、飛鳥寺がある奈良県明日香村の環境について気づいたこと

があった。私は今年の夏に韓国へインターンシップで行ったため、その時に百済であった地域である現在の扶余に行こうとしたが、悪天候の関係で実際に行くことは出来なかったが、扶余の資料や写真から見た扶余の環境がとても明日香村と似ていることに気づいた。飛鳥寺が建てられた環境と扶余の環境が似ていることは、明日香村だからこそ百済からの渡来人は百済と同じような寺院である飛鳥寺を建てたのではないかと思った。

これ以外にも学んだことはたくさんあった。特に思ったことは、本などの文献資料からだけで学んだことには限界もあり、フィールドワークを行うことで資料とはまた違った新しい発見が出来ることである。現地を実際に見てみることの重要性をとっても強く感じたので、今回のフィールドワークで学んだことを今後の研究に活かしていきたい。

#### ④ 勝山義弘（多摩大学経営情報学部 2 年）

アジアダイナミズム班は 4 月から文献調査を始め調べてきた。奈良を訪れるのは今回が初めてであった。文献で得た情報は確実ではないこと、いまだわかっていないものである、と清水先生から教わった。地形からは、斑鳩という地域がある。明日香村より北にあり、飛鳥と難波を結ぶ川船は必ず通る場所になっている。当時は飛鳥都の防波堤のような役割をしていた。瓦についても多くのことに触れられていた。文献だけでは限界があったが、資料をもらい説明を受けることで得るものがたくさんあった。

帝塚山大学の学生の皆さんは歴史と地形から飛鳥寺を調べていた。アジアダイナミズム班は歴史から飛鳥寺を調べるという切り口はなかった。遣隋使は 600 年をはじめとし、4～6 回派遣されたと言われている。だが、日本書紀にはこの記述はない。623 年から留学生・留学僧が 20 人弱帰ってきたとされている。倭国の方向性を決める大事な役目であった。

#### ⑤ 王星星（中国・天津財経大学交換留学生）

奈良市と西安市はかつて日中両国の首都として深い絆で結ばれていた。この歴史的な良縁によって、1974 年（昭和 49 年）に奈良市と陝西省西安市は友好姉妹都市関係を結んだ。1979 年（昭和 54 年）、私の祖父は訪日団の一員として、西安市農業友好視察団は奈良などの町へ視察した。子供の頃、祖父の写真集が大好きだったので、奈良の歴史と文化を調べた。今回、東海道新幹線に乗って山々を通り抜けて見た自然の風景は、私の故郷にとっても似ていて、異国にいるという感じは全くしなかった。京都で乗り換えた在来線の車窓からは唐の時代の建築様式にとっても似た東寺の五重塔が見えてきた時は、私は実家へ帰る列車の中にいるような錯覚に陥ってしまい、夢の中のような一時だった。

日本、中国、朝鮮、東アジアの歴史根源は長く、お互いどこかで似ている要素は沢山ある。奈良は、日本の古都として、文明の源流がここで生まれ育った。文明が誕生するところは異文化交流がずっと存在すると言われている。遙か昔、現在の日中韓、さらにはアジア地域は如何に交流を図ってきたか。同時に、我々は、その時代から何を学ぶべきか、いろいろと考えさせられた貴重な体験になった。

⑥ 宮崎 真（多摩大学 OB、現上智大学大学院修士課程 2 年）

帝塚山大学との合同ゼミで、飛鳥寺を事例として東アジアとの交流の意義を確認できて何よりだった。帝塚山大学の鷺森浩幸先生による、飛鳥寺の成り立ちや位置付けについての解説は、我々が熟知していなかったことはもとより、類義ではあるけれども、異なる言葉が使われているなどして、とても参考になった。また、同大学の清水昭博先生の寺院に関する考古学的な説明は、鷺森先生による説明にも当てはまることだが、我々が翌日行った飛鳥寺や元興寺での見学において、貴重なレンズとなり、見学がより一層実り多いものになった。帝塚山大学の学生による発表も、我々と注視する点が異なっているので、我々があまり探求していなかった部分が探求されていて、参考になったというだけでなく、同じことについて研究している彼らとの交流は、非常に刺激になった。今後とも、置かれている環境が異なる方々との交流を重ねていきたいとあらためて強く思った。最後になるが、帝塚山大学の皆様、今回の合同ゼミにおいていろいろとご協力いただいたことを感謝の意を表したい。また、いつか皆様にお会いできる日を楽しみにしている。

## 【帝塚山大学 HP より】

(<http://www.tezukayama-u.ac.jp/faculty/humanities/news/2013/11/18/post-133.html>)

【日本文化学科】多摩大学との合同ゼミ「東アジアのなかの飛鳥寺」を開催しました

2013 年 11 月 18 日

10 月 28 日（月）に多摩大学のインターゼミ・アジアダイナミズム班との合同ゼミを開催しました。多摩大学からゼミ担当の経営情報学部の金美徳教授・巴特尔准教授と学生 6 名を迎え、日本文化学科鷺森浩幸教授・清水昭博准教授と学生 4 名とともに、奈良・東生駒キャンパス図書館「シーキューブ」で、なごやかな雰囲気の中で報告・レクチャーなどが行われました。

まず、自己紹介をした後、多摩大学からは「日本とユーラシアの交流-飛鳥寺を手掛かりに-」、本学からは「吉川真司『飛鳥の都』について」と題する、学生による報告が行われました。いずれもそれまでの学習の成果がよく出たものでした。

本学の報告は、鷺森教授を中心に、自主的な学習会の形で、吉川真司著『飛鳥の都』の最初の部分を読み進めてきた成果です。十分な時間を持つことはなかなか難しかったのですが、学生も熱心に参加して学習しました。

次に、鷺森教授の「飛鳥寺について-歴史編」、清水准教授の「飛鳥寺について-考古編」という 2 本のレクチャーが行われました。歴史学の立場と考古学の立場から、飛鳥寺に関わる問題を論じたもので、新たな知識を得ることができた、と思われま。

短い時間だったので、両学の学生がすぐに打ち解けるとまではいかなかったようでした



が、貴重な機会であったと思います。



帝塚山大学の学生の発表



多摩大学の学生の発表

以上